

大中遺跡

- 史跡大中遺跡内容確認調査(第19次・20次)報告書 I -

2004年10月

兵庫県教育委員会

大中遺跡

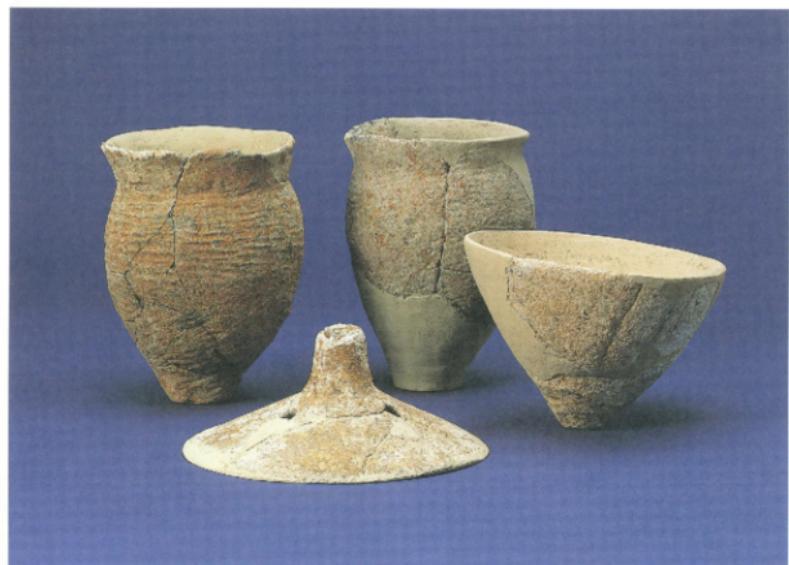
- 史跡大中遺跡内容確認調査(第19次・20次)報告書 I -



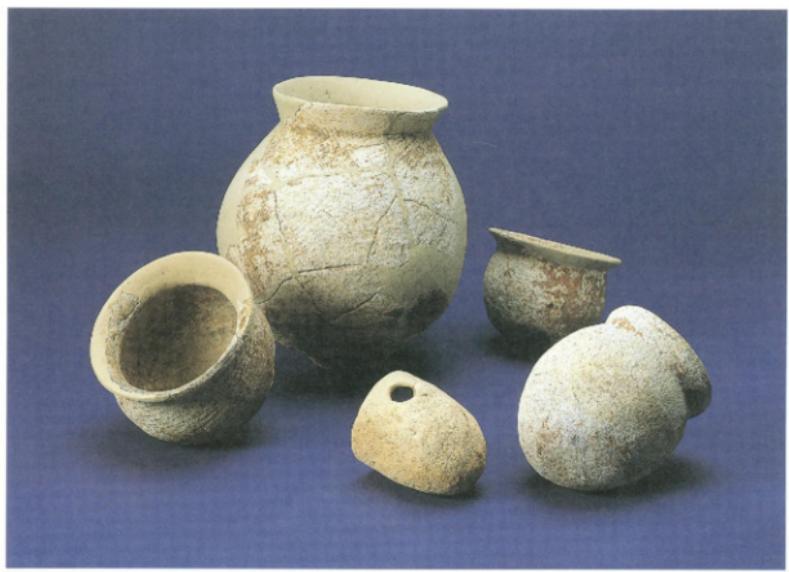
大中遺跡遠景（北東から）



大中遺跡近景（南西から）



第19次調査：SK1906出土土器



第20次調査：SH2001c土坑出土土器

例　　言

1. 本書は、兵庫県加古郡播磨町大中字大増405-2・405-3・405-4・405-6・406・407・411・432に所在する、国指定史跡大中遺跡の発掘調査報告書である。兵庫県文化財調査報告の第273冊にあたる。
2. 発掘調査は、国指定史跡大中遺跡の内容確認のために実施し、文化庁より補助金の交付を得ている。
3. 発掘調査は、平成14年度(第19次調査)・平成15年度(第20次調査)に兵庫県教育委員会が実施し、同埋蔵文化財調査事務所 種定 淳介と小川 弦太が担当した。
4. 遺構の実測は、調査員と調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。
5. 写真は、遺構を調査員が撮影し、空中写真撮影については、大阪測量株式会社、遺物についてはイーストマン株式会社に委託した。
6. 本書の挿図第4図「周辺の遺跡」は、国土地理院発行の1/50,000「高砂」を使用した。
7. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基とし、方位は国土座標V系の座標北を指す。
8. 本書の図集は種定の助監のもと、主に小川が行い、執筆は種定・小川が担当した。また、第3章の石器については、藤田 淳が、第4章については多賀 茂治が執筆した。
9. 調査で出土した遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館(明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1)に、また作成した写真・図版等の資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(神戸市兵庫区荒出町2丁目1-5)において保管している。
10. なお、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々および機関から多大なご教示とご指導、ご協力をいただいた。記して深く感謝の意を表します。

浅原 重利・石野 博信・上田 哲也・工業 普通・足川 長・佐々木 寛一・福宜田 佳男・間壁 茂子・和田 晴吾(順不同・敬称略)

文化庁・播磨町・播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館

凡　　例

1. 遺物は原則として通し番号をついているが、石器にはSを頭に付加し、土器との区別を図っている。
2. 弥生土器および土師器については実測図の断面を白抜きにし、須恵器については黒塗り、陶磁器については網かけで表現している。

本文 目 次

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	5
第2節 これまでの調査	5
第3節 調査体制	6

第3章 調査の結果

第1節 調査区の概観	7
第2節 第19次・20次の調査	8

第4章 まとめ

第1節 第19次・20次調査の成果	35
第2節 大中遺跡の再検討	35

卷頭図版目次

巻頭図版 1

- 上段：大中遺跡遠景（北東から）
下段：大中遺跡近景（南西から）

巻頭図版 2

- 上段：第19次調査：S K1906出土土器
下段：第20次調査：S H2001c土坑出土土器

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1	第27図 S K1906出土上器	25
第2図 大中遺跡現況図	1	第28図 S K1910	26
第3図 愛宕塚古墳	2	第29図 S K1910出土土器	27
第4図 周辺の遺跡	3	第30図 S K1903ほか出土石器	27
第5図 19次・20次トレント位置図	7	第31図 S K2012	27
第6図 調査区旧地形復元図	7	第32図 S K2012出土上器	28
第7図 S H1901	8	第33図 S K2013	28
第8図 S H1901出土土器	10	第34図 S K2013出土土器	28
第9図 S H1901出土石器	11	第35図 S K2016	29
第10図 S H1902 a	12	第36図 S K2016出土土器	29
第11図 S H1902 b・c	13	第37図 S K2019	30
第12図 S H1902出土土器・石器	14	第38図 S K2019出土土器	30
第13図 S H1903出土土器	15	第39図 S K2020出土上器	30
第14図 S H2001 a	16	第40図 P76出土土器	30
第15図 S H2001 b・c	17	第41図 S D2007出土土器	31
第16図 S H2001 c 土坑	18	第42図 S D2007土層断面図	31
第17図 S H2001出土土器	19	第43図 第1～11次、19～20次調査全体図	34
第18図 S H2002	20	第44図 坂穴住居の型式分類	36
第19図 S H2002出土土器	21	第45図 坂穴住居の型式類別	37
第20図 S H2003	22	第46図 1期（大中Ⅰ式）	40
第21図 S H2003出土土器	22	第47図 2期（大中Ⅱ式）	40
第22図 トレント32平面図	23	第48図 3期（大中Ⅲ式）	41
第23図 S K1901	24	第49図 4期（大中Ⅳ式）	41
第24図 S K1901出土土器	24	第50図 坂穴住居のグルーピング	42
第25図 S K1901出土石器	24	第51図 大中遺跡の集落構造	43
第26図 S K1906	25	第52図 大中遺跡住人の活動領域	45

表 目 次

表1 発掘調査の経過	5
表2 出土遺物観察表	32・33
表3 遺構別出土土器	38
表4 各型式の存続時期	38

写 真 図 版 目 次

写真図版 1	上 S H1901 (南から)	写真図版 9	上 トレンチ32 (南西から)
	中左 S H1901 (東から)		下 S B2001 (東から)
	中右 S H1901土器出土状況 (南から)	写真図版10	上 S K1901 (北東から)
	下 S H1901床面 (北から)		中 S K1901 (南西から)
写真図版 2	上左 S H1901中央土坑 (北から)		下 S K1906 (北から)
	上右 S H1901張り出し部 (西から)	写真図版11	上 S K1910 (南西から)
	中 S H1901土器出土状況 (西から)		中 S K1910土器出土状況
	下 S H1901と考古楽器		(北東から)
写真図版 3	上 S H1902 a (南東から)		下 S K2012 (北から)
	中 S H1902 a (北東から)	写真図版12	上 S K2013 (東から)
	下 S H1902 a 中央土坑 (北東から)		中 S K2016 (南西から)
写真図版 4	上 S H1902 b・c (南東から)		下 S D2007断面 (南西から)
	中 S H1902 b・c (西から)	写真図版13	S H1901出土土器
	下左 S H1902調査風景	写真図版14	S H1902出土土器
	下右 S H1902と復元住居		S H1901・1903出土土器
写真図版 5	上 S H1903	写真図版15	S H2001出土土器
	中 S H2001 a・b (北西から)	写真図版16	S H2001出土土器
	下 S H2001 c (北西から)		S H2002出土土器
写真図版 6	上 S H2001 c (東から)	写真図版17	S H2002・2003出土土器
	中左 S H2001検出状況 (東から)		S K1901出土土器
	中右 S H2001セクション (東から)	写真図版18	S K1906出土土器
	下 S H2001 c 土坑 (北西から)		S K1910出土土器
写真図版 7	上 S H2002検出状況 (北西から)	写真図版19	上左 S K2012出土土器
	中 S H2002 (北西から)		上右 S K2013出土土器
	下左 S H2002 (南西から)		下左 S K2016出土土器
	下右 S H2002炭化物検出状況 (北西から)		下右 S K2019出土土器
写真図版 8	上左 S H2002炭化物	写真図版20	上 S H2003・S K1906・1910・ 2012出土土器
	上中 S H2002土器出土状況		下 S K2019・2020・P76・S D2007 出土土器
	上右 S H2002土器出土状況		出土石器
	中 S H2003 (南東から)	写真図版21	出土石器
	中左 S H2003中央土坑 (北東から)		
	中右 S H2003土器出土状況 (南東から)		
	下左 S H2003土器出土状況		
	下右 S H2003土器出土状況		

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大中遺跡が所在する加古郡播磨町は、播磨風土記に阿隅の津と呼ばれ、現在は兵庫県南部中央に位置し、加古川の約4km東、加古川市と明石市に挟まれた海浜部にあたる。遺跡は播磨町の最北部に位置し、北500mには国道2号線、また北東1.8kmにはJR山陽本線土山駅、南東1.6kmには山陽電鉄播磨町駅がある。また、遺跡の東には喜瀬川が南流し、播磨灘に面する海岸線までは約2km、はるか南東には淡路島を望む。

播磨町の面積は9.09km²と兵庫県で最も小さいが、人口は34,498人と県下の町で最も多く、神戸・姫路への通勤圏として発展を遂げている。それを示すように町内の平均年齢が40歳と若く、人口密度も3,714.6人/km²と高い。気候は、瀬戸内気候に属し、平成7年～14年の年平均気温は摂氏15.2度、年間平均降水量



第1図 遺跡の位置



第2図 大中遺跡現況図

は981.9mm、年間平均降水日数は95日である。5月から8月にかけては、「南風（まぜ）」と呼ぶ南西の風が吹き、夏には朝風・夕風という瀬戸内特有の無風状態がおきる。10月から3月にかけては、北ないし北西の播州地方特有のからっ風が吹く。

大中遺跡は、加古川東部に広がる印南野台地の南縁部に立地している。この台地は、標高3～135mで加古川、明石川、播磨灘に囲まれている。第四紀に入って活発化した六甲変動の隆起に伴って形成された洪積台地で、その構造物には、砂・シルトなどの厚さ1～3mの細粒質層が顯著である。

大中遺跡は、段丘Ⅱ面・砂堆帯に位置しており、ここは更新世の中で相対的に温暖であったとき汀線付近に形成された砂堆列であった。大中遺跡の集落が立地する微高地はかつての砂堆であり、潰目池などの溜め池や流路は、堤間湿地のなごりである。遺跡の東側は二級河川喜瀬川が流れている。喜瀬川は福美町六分一に源を發し播磨灘に注ぐが、水源が乏しいため降雨時以外は水量はわずかである。

大中遺跡付近は完新世に入ってから大きな地形の変化はなかったとされている場所であり、弥生時代の地形も現在とほとんど変わらないと見られる。

第2節 歴史的環境

大中遺跡周辺で最初に人類がその痕跡を残しているのは、大中遺跡およびその西側に広がる山之上遺跡である。この両遺跡からは、サスカイト・チャートを石材とする旧石器が数多く採集されており、ナイフ形石器など多様な器種が確認されている。続く縄文時代に属する遺跡は播磨町内には見つかっていない。

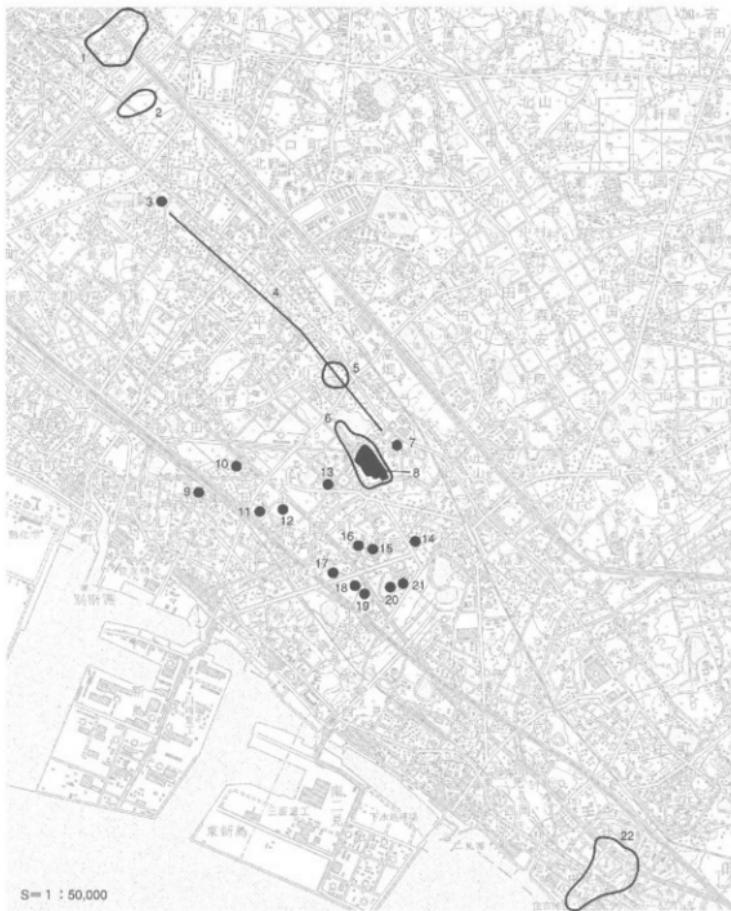
大中遺跡に人が住み始める弥生時代になると、周辺の遺跡の数が増え始める。大中遺跡の北西5kmにある溝之口遺跡は加古川流域の遺跡として有名である。昭和40年代初めに加古川バイパスの建設によって発見され、弥生時代前期から後期まで続く加古川流域で最大の拠点集落となっている。中期以降集落の規模が発展し、いわゆるベッド状構造とよばれる高床部を持つ住居跡や、イイダコ壺などが発見されている。平成15年度に発掘調査の行われた坂元遺跡では、弥生時代中期後半の方形周溝墓が10基見つかった。中には石剣が刺さった人物の墓と考えられるものがあり、当時の戦いの様子を伝える貴重な資料となっている。長畠遺跡は大中遺跡の北西1kmにあり、古代山陽道の発掘調査時に見つかった集落跡である。弥生時代中期後半から後期に属する堅穴住居跡が8棟見つかっている。堅穴住居跡からはイイダコ壺、甕、高壙などの土器が出土している。

平成13年11月に加古川市教育委員会が行った山之上遺跡での調査では、弥生時代後期に属する土坑や溝などが検出されている。大中遺跡と合致する時期の遺構・遺物が発見されているため、大中遺跡の範囲が加古川市域にまで広がる可能性が指摘されている。

愛宕塚古墳は、播磨町内で確認できる唯一の古墳である。大中遺跡の南東0.9kmに位置するこの古墳は県指定文化財の直径約22mの円墳である。古墳時代中期の築造と考えられ、墳丘には幅4.5mの周濠をめぐらせ埴輪を樹立している。現



第3図 愛宕塚古墳



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	瀬戸口遺跡	弥生～平安時代	9	本庄散布地	中世	17	野添4号散布地	古墳時代
2	坂元遺跡	弥生時代	10	古田1号散布地	中世	18	二子1号散布地	中世
3	古内道跡	奈良時代	11	古田2号散布地	中世	19	二子2号散布地	中世
4	古代山陽道	奈良時代	12	古田3号散布地	中世	20	二子3号散布地	古墳時代
5	長畠遺跡	弥生時代	13	大中散布地	弥生時代～中世	21	二子4号散布地	平安時代
6	山之上遺跡	旧石器時代	14	重容塚古墳	古墳	22	魚住占窓量群	中世
7	野添1号墳	旧石器～弥生時代	15	野添2号散布地	平安時代			
8	大中遺跡	弥生時代	16	野添3号散布地	中世			

第4図 周辺の遺跡

在の海岸線から約2kmのところに位置する。周辺にはさらに2基の古墳があったと伝えられてはいるが、宅地化されており消滅している。

律令政治が本格的に採用される奈良時代になると、播磨町周辺は山陽道沿いの地として発展を遂げる。播磨町北部を通る国道2号線に平行して古代山陽道が通っており、大中遺跡の北西から加古川市駅池付近にわたる約3kmの間ではその痕跡を現在の土地区画に残している。駅池の南側にある古大内遺跡は古代の瓦が出土するため、古代寺院跡と考えられていたが、出土瓦や歴史地理学的研究によって現在は賀古駅家跡に想定されている。「延喜式」の記載によれば、賀古駅家は「駅馬四十疋」を常備したとあり、当時日本最大の駅家であったと考えられる。遺跡周辺では近年の開発に伴い発掘調査が数回行われているが、全容を解明するには至っていない。

平安時代以降中世になると集落の立地が現在と重なることもあり、播磨町内で中世の遺跡はほとんど確認されていない。唯一遺構が確認されているのが大中遺跡の掘立柱建物である。中世になると播磨町では住吉神社領阿門荘が成立する。さらに中世末期には、本荘や古田に城館が築かれたとの言い伝えが残っている。それらの地域は、本荘・古田・野添・二子などの散布地として現在知られている。播磨町周辺では、大中遺跡の南東約5kmにある魚住古窯址群が古代から中世にわたり須恵器の生産地として発展を遂げる。神戸市神出古窯址群と共に神出・魚住と称される須恵器は南は九州、北は関東にまで広く出荷され当時の兵庫県の特産品として全国に流通している。

<参考文献>

- 榎本 誠一・松下 勝 1984『日本の古代遺跡3 兵庫南部』 株式会社 保育社
- 山本三郎 1990『播磨大中遺跡の研究』 播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館
- 兵庫県教育委員会 1992『史跡大中遺跡環境整備事業報告書』 兵庫県教育委員会
- 加古川市史編さん専門委員 1996『加古川市史 第四巻 史料編Ⅰ』 兵庫県加古川市
- 兵庫県教育委員会 2003『坂元遺跡現地説明会資料』 兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会 2004『兵庫県遺跡地図』 兵庫県教育委員会

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

兵庫県教育委員会では、平成11年度から県立考古博物館（仮称）の整備の検討をはじめ、平成14年度には「播磨大中古代の村」（大中遺跡）の隣接地に、参加体験型の新しいスタイルの博物館を、埋蔵文化財調査事務所と一緒に整備する基本構想を策定した。これに続いて平成15年度には基本計画を策定し、平成19年度の開館に向けて事業を推進している。

大中遺跡には既に遺跡のガイダンス施設として播磨町郷土資料館が整備され、小中学生を対象とした古代体験学習を毎年開催し、東播磨地域における歴史学習の場としての役割を果たしているが、施設・スタッフの限界により、県民からの要望に十分には対応できない状況である。このため県立考古博物館（仮称）を唯一の県有の史跡公園である「播磨大中古代の村」の隣接地に整備することにより、この史跡公園の機能を最大限に活かした体験学習をはじめとする歴史学習の機会を広く兵庫県全域の住民を対象として提供するとともに、考古博物館・埋蔵文化財調査事務所の調査研究能力を活かして大中遺跡の調査研究をすすめ、国史跡としての大中遺跡の価値をさらに高めることを計画している。

第2節 これまでの調査

播磨大中遺跡に発掘調査の手が入ったのは昭和37年（1962年）である。それ以降、国指定史跡にむけた整備が続けられ今回を含め20次の調査が行われて来た。発掘調査は大きく3期に分けることができる。第1期（第1次～第11次）は昭和37年の遺跡発見から昭和46年までの史跡環境整備前に実施された発掘調査であり、遺跡の内容・範囲の確認を目的としたものである。第2期（第12次～第17次）は昭和56年から昭和63年までに実施された発掘調査であり、遺跡内外の環境整備や施設整備に伴う発掘調査である。第3期（第18次から第20次）は平成9年以降に行われた調査であり、県立考古博物館（仮称）に伴う発掘調査およびこれに伴う史跡内容確認を目的とした調査である。

発掘調査は第1次～第5次調査・第12次調査～第18次調査を播磨町教育委員会が調査主体となって実施し、第6次～第11次調査・第19次～第20次調査は兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

表1 発掘調査の経過

年（昭和年）	6月 遺跡発見（播磨中学校生徒3名による）	
	12月 第1次調査（翌年1月まで）	
1963年（昭和38年）	3月 第2次調査（4月まで）	
1964年（昭和39年）	7月 第3次調査（8月まで）	
1965年（昭和40年）	3月 第4次調査（4月まで）	
1966年（昭和41年）	8月 第5次調査（遺物整理）	
1967年（昭和42年）	3月 報告書発行	
1968年（昭和43年）	7月 第6次調査（8月まで）	
1969年（昭和44年）	12月 第7次調査（翌年1月まで）	
1970年（昭和45年）	8月 第8次調査	
1971年（昭和46年）	2月 第9次調査（3月まで）	史跡指定
1972年（昭和47年）	3月 第10次調査（4月まで）	
1973年（昭和48年）	12月 第11次調査（翌年1月まで）	
1981年（昭和56年）	2月 第12次調査	
1984年（昭和59年）	3月 第13次調査（4月まで）	
1986年（昭和61年）	7月 第14次調査（8月まで）	
1987年（昭和62年）	1月 第15次調査（3月まで）	
1988年（昭和63年）	11月 第16次調査（12月まで）	
1997年（平成9年）	4月 第17次調査	
2002年（平成14年）	5月 第18次調査（7月まで）	
2003年（平成15年）	7月 第19次調査（10月まで）	
	7月 第20次調査（11月まで）	

第3節 調査体制

【発掘調査体制】

1. 平成14年度の全面調査（19次調査）の概要

大中遺跡の西にのびる直線道路を基準にし、20m方眼を設定した。その方眼に従い、合計19カ所のトレンチを設定し調査を行った。



調査担当職員 普及活用班 種定 淳介

調査補助員 小谷 義男・柴田 岬三光

考古学者養成セミナー受講生

2. 平成15年度の全面調査（20次調査）の概要

19次調査の方眼を利用し、昨年度の南側に調査区を設定した。合計16カ所のトレンチの調査を行った。



調査担当職員 普及活用班 種定 淳介・小川 弦太

調査補助員 小谷 義男・柴田 岬三光・永野 宏樹

考古学者養成セミナー受講生

3. 整理作業

整理作業は、平成16年に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理担当職員 普及活用班 種定 淳介・小川 弦太

実測トレース 友久 伸子・増田 麻子・佐々木 哲子

接合・復元 吉田 優子・西口 由紀・石野 照代・中田 明美・藏 幸子・大仁 克子

加藤 裕美・岡田 祥子・又江 立子

考古学者養成セミナー受講生



第3章 調査の結果

第1節 調査区の概観

大中遺跡は、歴史学習、古代体験、憩いの場として活用するため現在大きく5つのゾーンに分けた整備が行われている。今回の調査区は遺跡西部の「屋外展示ゾーン」として整備されているブロックを対象とする。

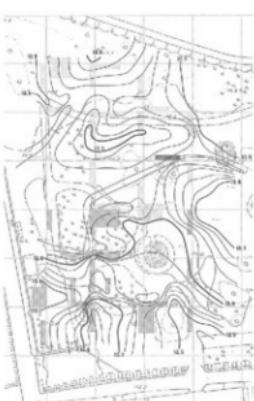
調査区を設定するにあたって史跡西側に延びる直線道路を基準とした20m方眼のグリッドを設定し、トレンチを設定した。トレンチは幅2m×長さ10mを基本とし、各グリッド内に東西・南北方向に各1カ所設定した。400m²のグリッド内の10%が調査対象部分となるようにした。トレンチは最終的に35カ所設定を行い、遺構の検出状況によって、随時トレンチの拡張を行った。第19次・20次調査の各トレンチの位置は第5図のとおりである。

この屋外展示ゾーンでは、弥生時代終末期の堅穴住居を2棟上屋まで復元し、堅穴住居の掘り込みを6棟分再現している。遺跡は、遺構保護のため旧地表面上に約0.6m～1mの盛り土を施し造成を行っている。そのため、旧地形は現状で確認することはできない。

第6図は、第19次・20次調査の各トレンチでの遺構検出面から復元した地形図である。遺構検出面の標高は調査区中央部付近（L、Kライン）が最も高く、そこから東西にいくにしたがって低くなっている。南北方向では調査区の南東部に向かって緩やかに標高が高くなっている。現在、大中遺跡の北西部にある住宅街は元はため池であったところであった。復元される標高は住宅地に向かって緩やかに低くなり、検出される遺構の密度が少なくなっている。今回遺構検出面から復元された微高地部分はこれまでの調査において、遺構が集中して検出されているところと重なり合うところであり、段丘上においてもさらに微高地上の安定した場所に集落を築いている。



第5図 19次・20次トレンチ位置図

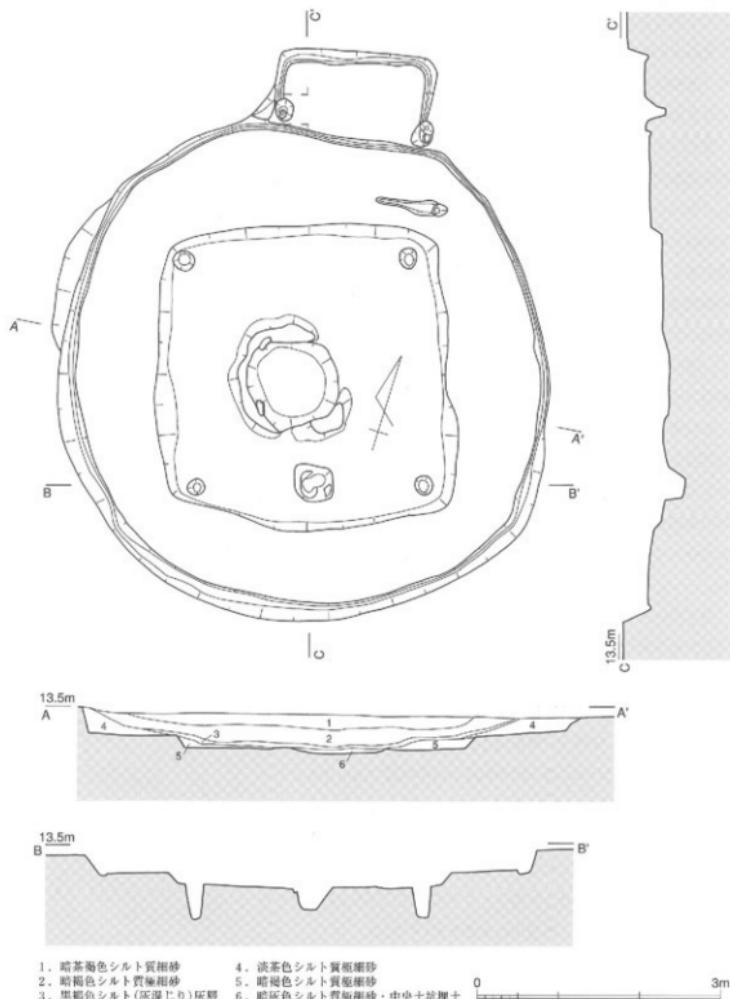


第6図 調査区旧地形復元図

第2節 第19次・20次の調査

竪穴住居跡

第19次・20次調査において建て替えを含め合計6棟の竪穴住居跡が出土している。住居跡は、長方形・円形・四角形・五角形とバリエーションに富んでおり、建て替えや拡張も認められる。そのうち5棟は



第7図 SH1901

いわゆるベッド状遺構と呼ぶ高床部を屋内施設にもつ住居跡である。

S H1901 (第7図、写真図版1・2)

検出状況 調査対象地区の最北部に設定したトレンチ2の南西部で住居跡の一部が検出され、トレンチを拡張して全容を明らかにした。地表面から約1.4m掘削した高さで検出し、住居跡の床面は標高13m前後である。

規模・形態 直径6.0~6.2mのわずかにゆがむ円形の堅穴住居跡である。床面はベッド状遺構より15~20cm低く、一辺が3.5~3.7mの不整な隅丸方形を呈する。住居跡の北に接して、張り出し部が付設される。張り出し部とベッド状遺構を含めた総面積は、約31m²、中央の床面は約13m²である。

屋内施設 ベッド状遺構、周壁溝、主柱穴、中央土坑、張り出し部からなる。

ベッド状遺構 側壁の内側には、基盤層を掘り残した平坦なベッド状遺構が設けられる。

周壁溝 住居跡の側壁の内側のベッド状遺構外縁には、周壁溝が周囲している。幅5~10cm、深さ5cm前後である。なお、床面とベッド状遺構との境界には、周壁溝は存在しない。

主柱穴 主柱穴は床面の4隅から4本検出された。それぞれ直径は20cm前後、深さはいずれも40cm、柱間長は2.8mで均一にされている。

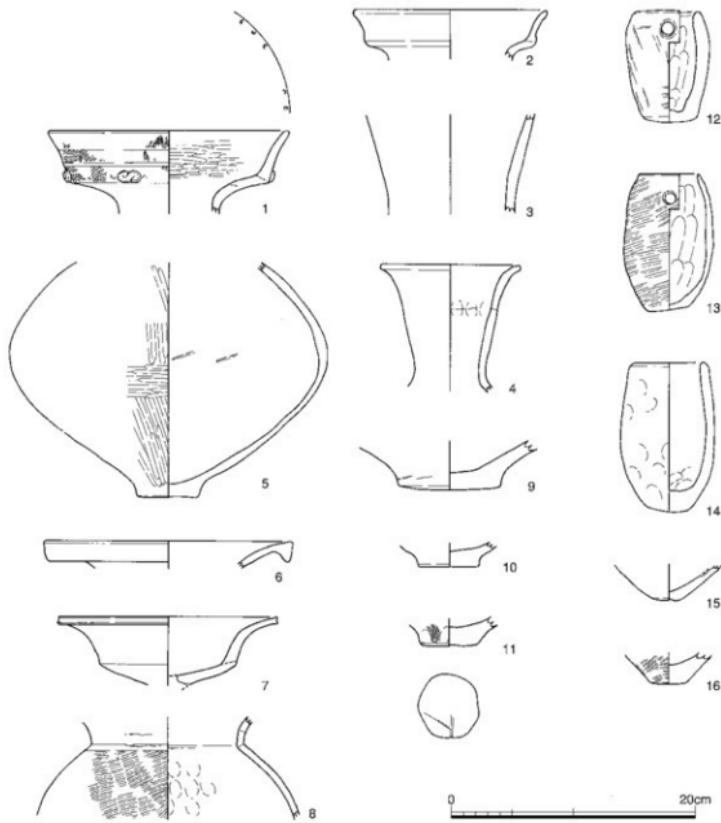
中央土坑 床面の中心には直径80cm、深さ5cmの浅い中央土坑がある。土坑には西半部を中心として、幅30cm、高さ3cm前後の周堤状の高まりが巡っていた。また部分的に被熱のため赤変した箇所が認められる。中央土坑の南、ベッド状遺構との中間の床面に、一辺40~50cm、深さ30cmの不整形な隅丸方形の土坑が認められる。床面では方形を呈するが、土坑底部は直径15cm前後で丸く取まる。中央土坑の付帯施設として、同時に機能していたと考えられる。

張り出し部 住居跡の北には、長辺2.0m、短辺1.2mの隅丸長方形の張り出し部が付設される。ベッド状遺構より5cm前後高く、張り出し部から南へベッド状遺構、床面へと高さを減じてゆき、階段状の通路のようである。この張り出し部には、幅10~15cm、深さ5cmの周壁溝が巡らされ、ベッド状遺構と接する箇所には2本の柱穴が検出された。柱穴は、直径が20cm前後、深さは20cm前後である。柱間長は1.75mである。

出土遺物

出土状況 住居跡が廃絶した後、凹地に土器が廃棄された状況を呈している。住居跡中央を厚く、外縁は薄く、レンズ状に土器が堆積していた。破片が多く、整理時に接合できる資料は少ない。また、中央土坑と張り出し部からも土器が出土している。石器も埋土から採集したものであり、原位置を保持したものではない。

土器 (第8図、写真図版13・14) 出土土器量は比較的多いが、國化に耐えうる資料は少ない。図示した土器のうち、1、2、4、10、11、15は中央土坑から出土したもので、他は住居廃絶後に廃棄された、埋土から出土した土器である。1、2は二重口縁壺である。二次口縁が外反して立ち上がり、1では外面を飾書き波状文とS字状浮文で飾り、縫部を竹管で押圧する。3、4は長頸壺。4は直線的に開く頸部と短く外反する口縁部である。5は張り出し部から出土した扁球形の壺体部である。外面をヘラミガキで仕上げる。6は外反する口縁の縫部を下方に拡張する。7は屈曲する杯部をもつ高杯で、口縁端部はわずかにくぼむ。8は外面に右上がりのタタキ成形を行なう壺で、体部最大径は23cm前後に復元される。9、10、11は平底、もしくはわずかに突出する底部である。12、13、14はイイダコ壺である。高さ10cm



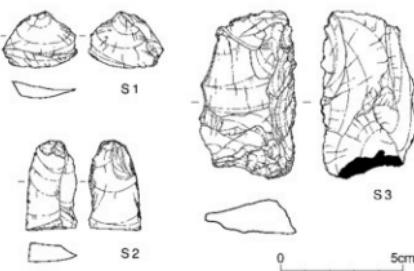
第8図 SH1901出土土器

前後、口径5cm前後で不安定な底部のコップ型を呈し、口縁部直下に延繩の孔をあける。13は外面にタタキ成形を施すが、他は摩滅のため不明である。15、16は尖り気味の底部である。16の外面には右上がりのタタキ成形が認められる。

石器（第9図、写真図版21） S1とS2はサスカイト製の剥片である。S1は平坦な1面の剥離面を打面とした横長剥片で、背面構成は石核底面と考えられるポジティブ様剥離面と、主剥離面と同一方向の1面の計2面のみである。風化で表面がやや荒れており、金山産の特徴に類する。S2は稜の真っ直ぐ通った縱長剥片で、側面には自然面が残り、末端は折れている。打面は複数面で構成され、バルブはよく発達している。腹面の左側縁に小剥離痕が連続しているが、バティナが少し新しく、後世に傷つけられたものであろう。自然面には爪状の割れ円錐痕が多数あり、石質は緻密で表面も滑らかであることから、二上山産と思われる。

これらの剥片は、明瞭な打面を有するという点で播磨地域の弥生時代の剥片とは異なる。風化度からも縄文時代以前に位置づけられよう。

S 3 はサスカイト製のナイフ形石器である。厚みのある大型剥片の打面側に、少し粗いが急角度の二次加工を連続させ、直線的な背縁としている。素材剥片の末端側は階段状剥離あるいは折れ面となっているが、そこに生じたシャープなエッジには微細な剥離痕が連続しており、刃部として使用したことがうかがえる。本資料はかなり大振りで、素材や形態は瀬戸内系のものとは異なっているが、背渕し加工と相対する刃部の使用痕との関係から、ナイフ形石器と考えておきたい。石質は S 1 に類似する。



第9図 SH1901出土石器

S H1902 (第10・11図、写真図版3・4)

復元された S H1101 の東に設定したトレンチ19から検出された竪穴住居跡である。3次にわたる建て替えが行われており、それぞれの切り合い関係を考慮して相対的に古い住居跡から a、b、c と呼称する。

S H1902 a (第10図、写真図版3)

検出状況 層位は最下層にあたり、最終検出面で確認した竪穴住居跡である。

規模・形態 外周壁溝は b・c と同一の基礎層にあり、全周はしていないが、…辺が7.2m前後の隅丸方形に復元できる。ベッド状造構を含めた総面積は、約52m²、中央の床面は約22m²である。

屋内施設 ベッド状造構、周壁溝、主柱穴、中央土坑からなる。

ベッド状造構 内側のすべての辺には幅1.2mのベッド状造構が設けられ、中央に25cm低い床面を形成する。床面の規模は4.6～4.8mの隅丸方形であり、幅5cm前後の内周壁溝が全周している。

主柱穴 主柱穴は床面の4隅に4本検出された。それぞれ直径は30cm前後、深さは60cm、柱間長は3.4mで均一にされている。

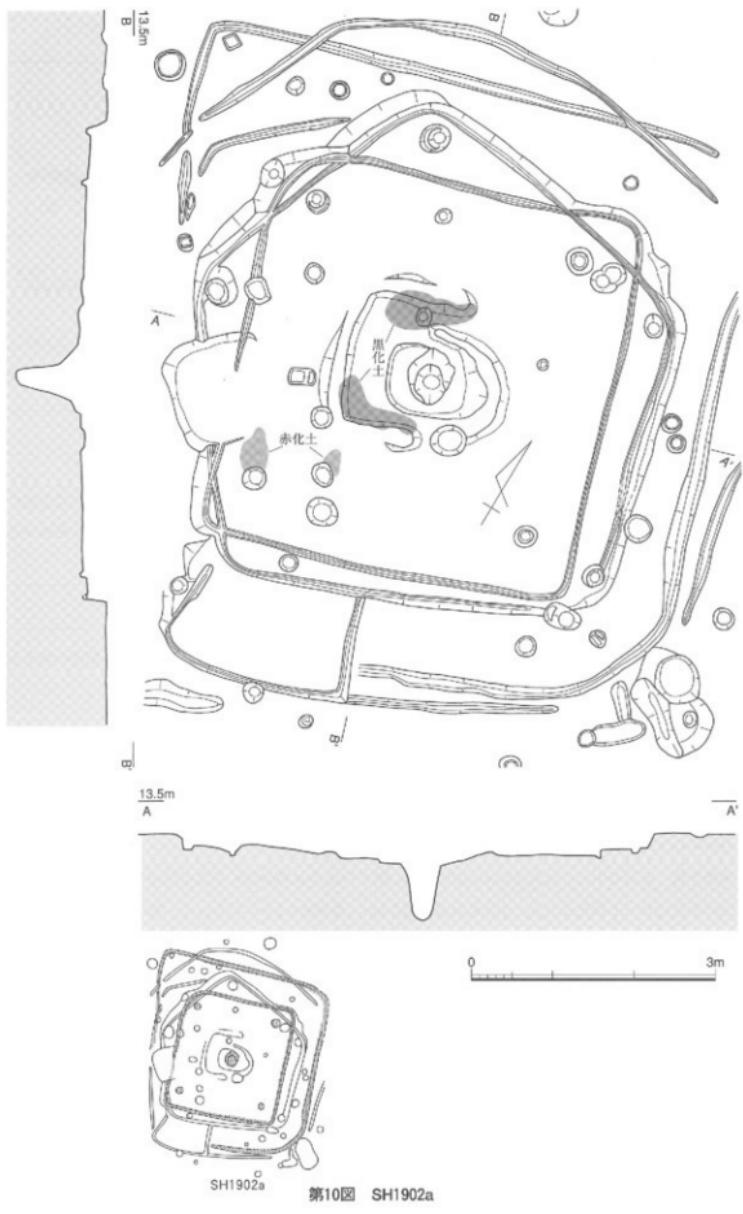
中央土坑 床面の中心には長径70cm、短径50cm、深さ70cmの比較的深い中央土坑があり、坑底は径が30cmの小さいロート状を呈する。土坑には長辺約2.0m、短辺約1.5mにわたって、幅30～50cm、高さ5cm前後の周堤状の高まりが巡っていた。またこの周堤状の高まりには、土坑をはさんで東西の2箇所が部分的に被熱のため黒色に変化した状況が認められる。さらに、南西柱穴の周辺の床には、被熱のため赤変した箇所が存在する。

出土遺物

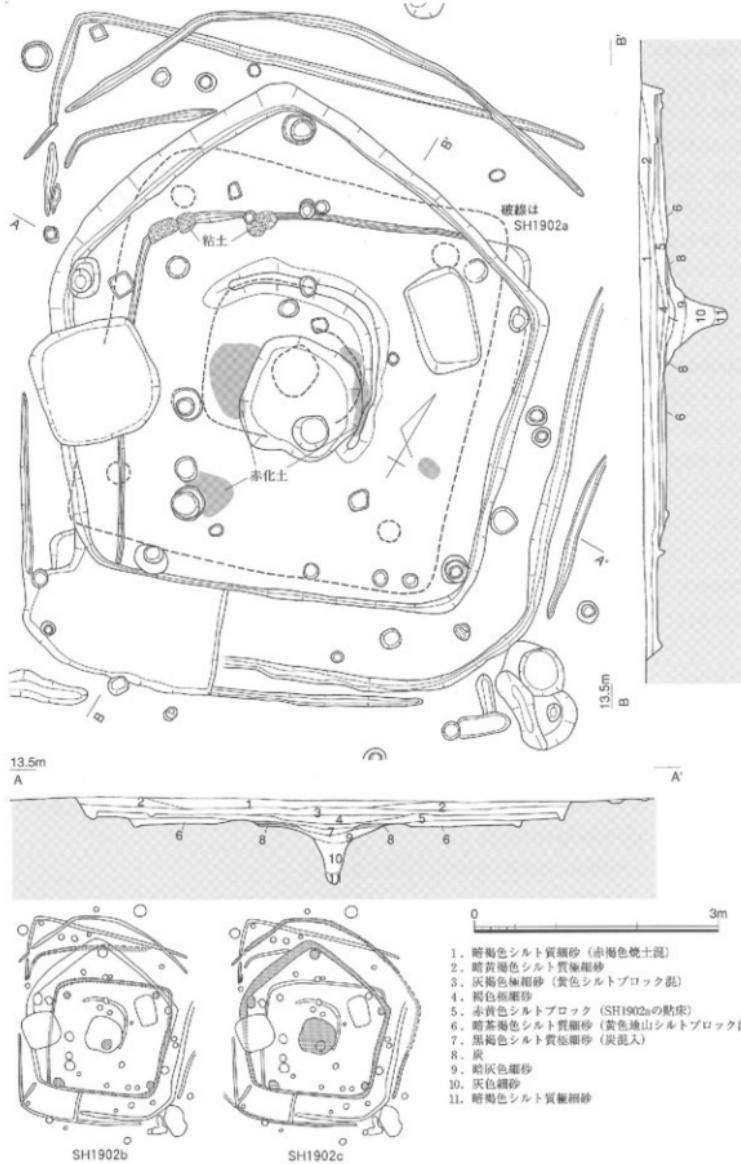
土器 (第12図、写真図版14) 出土遺物はきわめて少なく、また図示できるものも多くない。17は床面に密着して出土した高杯である。口径は14.0cmで小型のものであり、器表は摩滅して調整は不明である。

S H1902 b (第11図、写真図版4)

検出状況 S H1902 a が廃絶された後、主軸方位を北から10° 東に傾けて建て替えられた竪穴住居跡で



第10図 SH1902a



第11図 SH1902b・c

ある。aの床面に赤黄色のシルトブロックを含む細砂を厚さ10cm弱程度装填して「貼り床」を構築している。このため、bの床面を検出した段階では下層のaの内周壁溝、主柱穴、中央土坑は発見できない。

規模・形態 外周壁溝はa・cと同一の基盤層にあるが、削平のため部分的に消失している。わずかに認められる西辺の外周壁溝から全体を復元すれば、一辺が最大で7.2mの隅丸方形となる。ベッド状遺構を含めた総面積は、約52m²、中央の床面は約23m²である。aとは規模・規格もほぼ等しい。

屋内施設 ベッド状遺構、周壁溝、主柱穴、中央土坑からなる。

ベッド状遺構 外周壁溝の内側には幅1.2mのベッド状遺構が設けられ、中央に15cm低い隅丸方形の床面を形成する。内周壁溝はcの床面に削平されたために北と西の2辺のみが検出できた。主柱穴との相関を考慮すれば、床面の規模は一辺が4.8m前後の方形となる。

主柱穴 主柱穴は床面の4隅に4本検出された。それぞれ直径は30cm前後、深さは60cm、柱間長は3.4mで均一されている。重要な事実は、主柱穴のうち南辺の2本は、次の段階の住居跡cに引き継ぎ再使用されていることである。この点は、次節で触ることになる。

中央土坑 床面の中心には直径40cm、深さ50cmの中央土坑がある。土坑は上部も底部も同じ径を保つ筒状のもので、一括性の高い良好な土器が出土している。

S H1902 c (第11図、写真図版4)

検出状況 層位は最上層にあたり、検出初期段階で確認したベッド状遺構を付設する五角形の豊穴住居跡である。

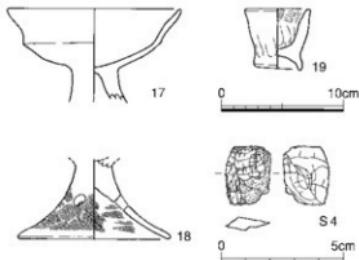
規模・形態 外周壁溝はa・bと同一の基盤層にあるが、削平のため部分的に消失している。残存する外周壁溝から全体を復元すれば、一辺が6.0m前後の隅丸五角形となる。ベッド状遺構を含めた総面積は、約50m²、中央の床面は約27m²である。

屋内施設 ベッド状遺構、周壁溝、主柱穴、中央土坑からなる。

ベッド状遺構 外周壁溝の内側には幅1.2mのベッド状遺構が設けられ、中央に15cm低い隅丸五角形の床面を形成する。その規模は一辺が3.5~4.4mと不均一で、いびつな五角形となっている。内周壁溝は幅5cm前後、深さ3cm前後で全周している。

主柱穴 主柱穴は床面の5隅に5本検出された。直径は最大で40cm、最小で30cm、深さは50cm、柱間長は3.2~3.7mで均一ではない。主柱穴のうち南辺の2本は、前段階の住居跡bと共有していた。すなわち、この2本以外では、bの北東の主柱穴を0.8m南東方向へ、またbの北西の主柱穴を1.2m西方向へ移動して設け、さらに北に新たな主柱穴を設けて広い床面を獲得することになる。このとき、共有する2本以外の主柱穴の拡張方向が不揃いのため、均整な五角形とはなりえていない。

中央土坑 床面の中心には直径1.5m、深さ10cmの浅い中央土坑がある。土坑の北には直径約2.0m、幅40cm、高さ3cm前後の周堤状の高まりが造っていた。この周堤状の高まりには、部分的に被熱のため赤



第12図 SH1902出土土器・石器

変した箇所が認められる。

なお、ベッド状造構の南隅にあたる部分には、長さ2.0m、幅1.2mにわたって床面と同一の高さまで下げられた箇所が存在する。周壁溝も巡らせており、張り出し部と考えよいのかもしれない。

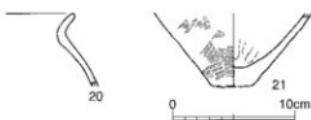
出土遺物

土器（第12図、写真図版14） 18は高杯脚部である。内外面には刷毛目を施し、3カ所に円形透かしをもつ。19は小型の鉢。高台状の短い脚台が張り出し、全体をナデで仕上げる。

石器（第12図、写真図版21） S 4は赤チャート製の剥片である。石質が悪いため剥離の状況は不明瞭である。腹面の筋理で割れたような平面的な折れは、おそらく剥離と一緒に生じたものであろう。

S H1903（写真図版5）

検出状況 第19次調査対象地区の南端部に設定したトレーナー11の南部で住居跡の存在が検出され、トレーナーを拡張して住居跡の一部を調査した。周壁溝の一部と柱穴を検出し、数次にわたる切り合いが認められる。



第13図 SH1903出土土器

規模・形態 部分的な調査のため、住居跡の全容は

明らかではない。内側にはやや鈍角に聞く周壁溝が検出され、その屈曲部の内側に直径20cmの柱穴がある。その外縁には、一辺2.7mの周壁溝が検出された。各屈曲部の内側には直径20cmの柱穴がある。周壁溝の屈曲は120°前後であり、平面形は六角形に復元されよう。

屋内施設 周壁溝、主柱穴、中央土坑が存在するが、部分的な調査のため詳細は不明である。

ベッド状造構 造構としては検出されてはいない。しかし、六角形に復元される周壁溝屈曲部内側に接して主柱穴が設けられていることを勘案すれば、その外縁に一段高いベッド状造構が存在していたことが推定される。ただし、数次の切り合いによる住居跡の重複と、後世の削平作用に起因して、現存しない。

周壁溝 内側のやや鈍角に聞く周壁溝と、その外縁の六角形の周壁溝が検出された。深さはいずれも5cm前後である。

主柱穴 内側のやや鈍角に聞く周壁溝の屈曲部内側に、直径20cmの柱穴がある。深さは30cmである。その外縁の六角形の周壁溝屈曲部内側に、直径20cmの柱穴がある。柱間長は2.6m、深さは30~40cmである。

中央土坑 トレーナーの西端で中央土坑の一部を検出している。直径は80cm以上、おそらく1.0m前後で、深さ10cm前後の浅い中央土坑となる。この中央土坑は、六角形に復元される周壁溝を設けた住居跡の付帯施設と考えられる。中央土坑の中心と主柱穴の距離は、それぞれ2.6mとなる。

出土遺物

土器（第13図、写真図版14） 20は緩やかに屈曲する壺口縁である。外面にわずかにタタキが認められるが、摩滅の進行した細片であるため調整や法量などの詳細は不明である。21は壺底部で、底面はわずかに突出している。外面には平行タタキが認められる。

S H2001（第14・15図、写真図版5・6）

トレーナー21の南東部で住居跡の一部が検出され、トレーナーを拡張して全容を明らかにした。地表面から

約70cm掘削した高さで検出し、住居跡の床面の標高は13m前後である。3次にわたる建て替えが行われており、それぞれの切り合い関係を考慮して相対的に古い住居跡からa、b、cと呼称する。

S H2001a (第14図、写真図版5)

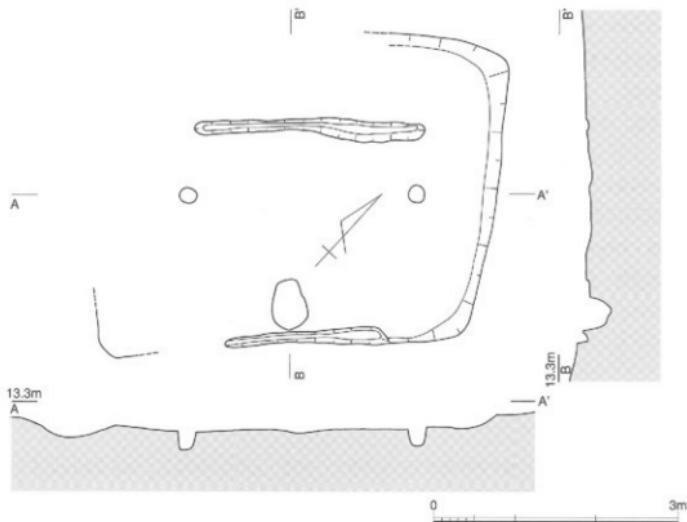
検出状況 居位は最下層にあたり、最終検出面で確認した竪穴住居跡である。

規模・形態 住居跡は北辺が若干長く、長辺5.3m、短辺4.6m、奥行き3.8mの台形プランに復元でき、室内の面積は18.8m²である。

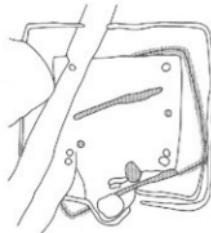
屋内施設 周壁溝、主柱穴、土坑が存在する。

周壁溝 周壁溝は全周せず、南側壁中央部に約2mの長さで検出された。主柱穴北側に幅15cm～25cm、長さ2.85m、深さ約5cmの屋内溝が直線的に掘られている。

主柱穴 主柱穴は床面に2本検出された。それぞれの直径は20cm前後、深さは25cm、柱間長は2.8mである。



第14図 SH2001a



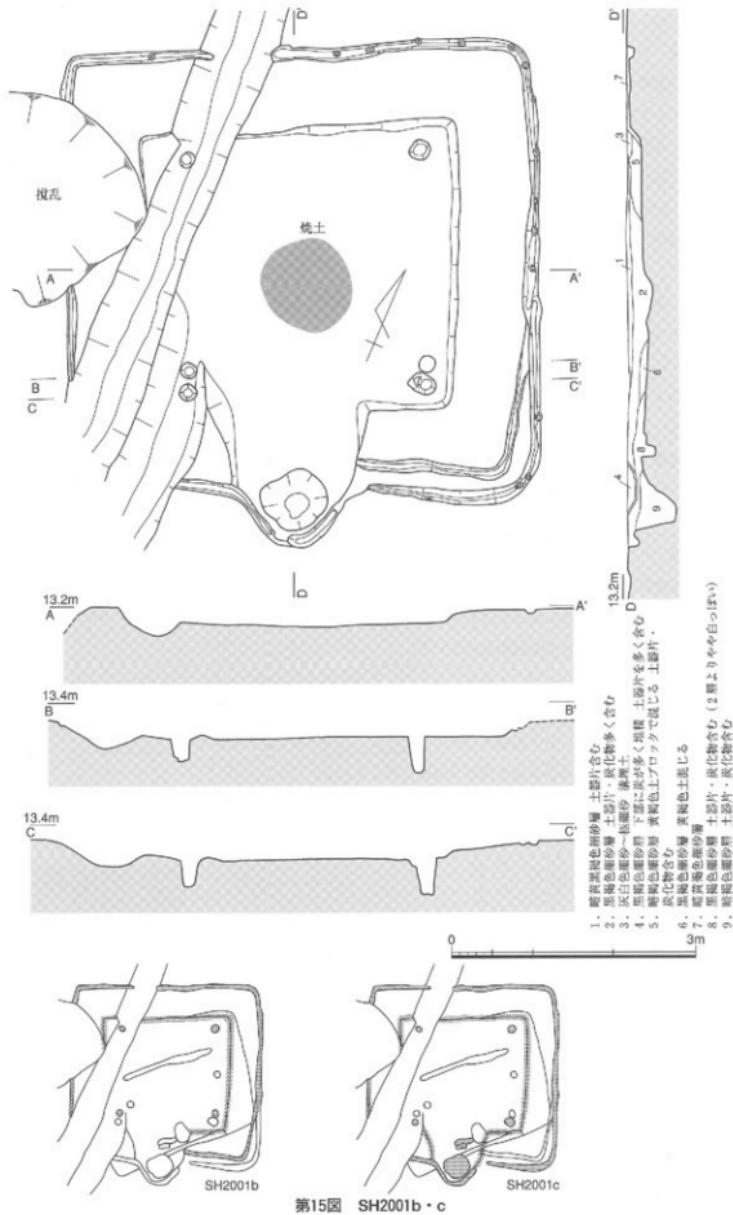
SH2001a

土坑 南側壁中央部には長径60cm、短径45cm、深さ30cmの土坑がある。土坑は底の径が小さいロート状を呈する。

S H2001b (第15図、写真図版5)

検出状況 S H2001aが埋没した後、主軸方位を北から25°傾けて建てられた竪穴住居跡である。

規模・形態 長辺5.8m、短辺5.4mの正方形に近いア



第15図 SH2001b・c

ランとなる。ベッド状遺構を含めた総面積は、31.3m²、中央の床面のみの面積は14.4m²である。

屋内施設 ベッド状遺構、周壁溝、主柱穴、中央炉からなる。

ベッド状遺構 周壁溝の内側に幅1mのベッド状遺構が設けられ、それより15cm低い方形の床面を中心には形成する。内周壁溝は存在しない。

周壁溝 周壁溝は、他の遺構に切られているが全周する。周壁溝のほとんどは次のSH2001cにも引き継がれており、SH2001bのみにあたる部分は南東角にあたる2.9mほどである。

主柱穴 主柱穴は床面の4隅に4本検出された。それぞれの直径は20cm前後、深さは30cm~60cm、東西柱間長2.9m、南北柱間長2.6mとなる。主柱穴のうち北2本は、次のSH2001bに引き継ぎ使用されている。

中央炉 床面の中央には直径1m、深さ5cmの比熱し赤変した中央炉を検出した。赤変部分の硬化が進んでいたため、SH2001b・cを通して炉として使われていたのであろう。

SH2001c（第15図、写真図版6）

検出状況 SH2001bを南に拡張し、新たに土坑を備えた張り出し部を設置した堅穴住居跡である。

規模・形態 SH2001bに張り出し部と拡張されたベッド状遺構を含めた総面積は33.6m²である。主柱穴を南へ移動し、張り出し部を設けることによって、SH2001bより総面積で2.3m²の拡張を行ったことになる。

屋内施設 ベッド状遺構、周壁溝、主柱穴、中央炉、土坑からなる。

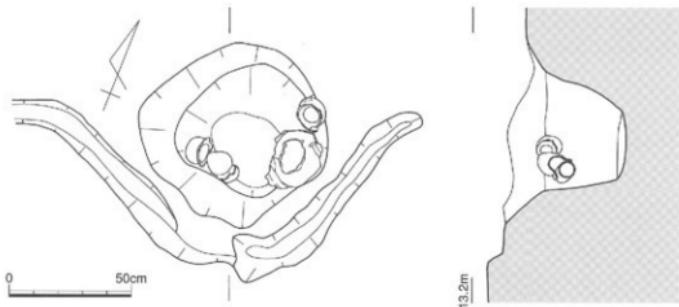
ベッド状遺構 SH2001bとはほぼ同じ規模のベッド状遺構である。

周壁溝 周壁溝は張り出し部分を含め全周している。幅12~20cm、深さ10cm前後ある。周壁溝内から直径8cmほどの柱穴が部分的に検出されている。

主柱穴 主柱穴は床面の4隅に4本検出された。主柱穴のうち北側の2本はSH2001bの主柱を利用している。主柱間の距離はそれぞれ2.8m前後となりほぼ正方形となる。南側2本の直径は20cm前後、深さは50cmと30cmとなる。bの南側2本の主柱穴を南へ25cm移動したことになる。

中央炉 SH2001bから引き継ぎ使用されたと考えられる。

張り出し部土坑 土坑は最大径80cmの楕円形をなし、床面から底部までの深さは50cmを測る。周囲が少



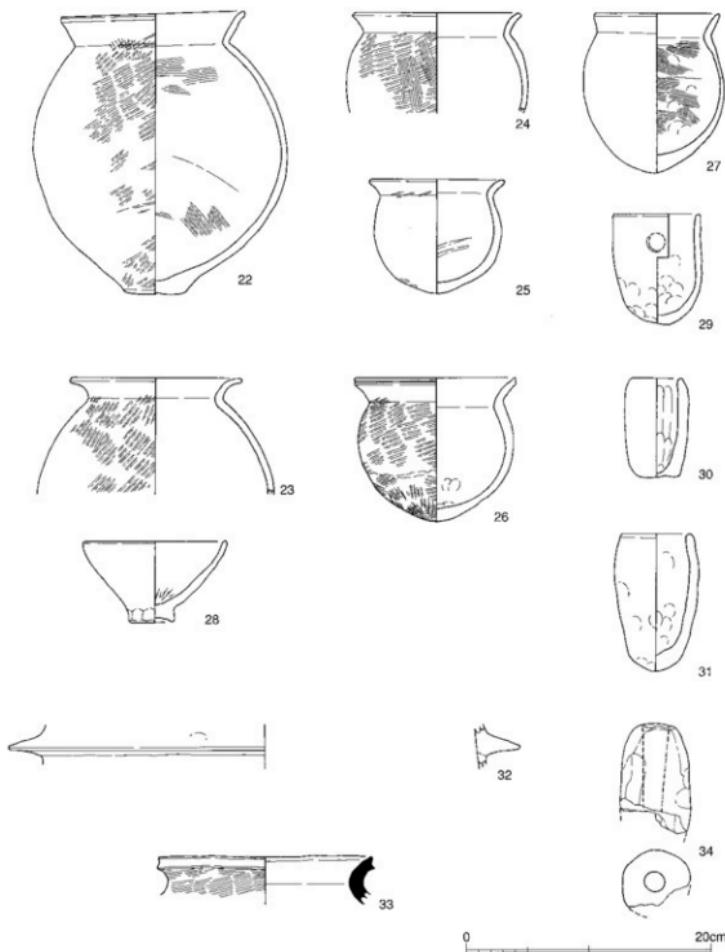
第16図 SH2001c土坑

し浅く途中から深く落ち込む二段掘りの土坑である。土坑には甕とイイダコ壺からなる上器群が収められていた。土坑埋土から炭化物の検出や、比熱の状況などは認められなかった。

出土遺物

出土状況 SH2001c の土坑から一括で土器が出土しているが、埋土からの出土は少ない。また、住居跡を切る溝と集石造構からもわずかに土器が出土しているが、中世の所産である。

土器 (第17図、写真図版15・16) 22～29は、SH2001c の土坑から一括で出土した土器である。22は全

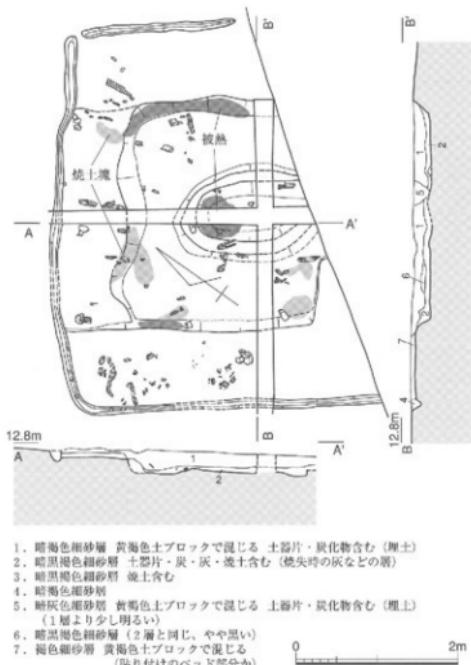


第17図 SH2001出土土器

形を推定できる甕である。球形の体部は径20.3cmで右上がりのタタキ成形を行い、底部は上げ底氣味で、厚く大きい。口縁はくの字に屈曲し端部は面をなす。23は甕の上半部で、口縁は緩やかに屈曲し、わずかに外反する。24は外面を右上がりのタタキ成形のち、縱方向の刷毛で仕上げる。25、26、27は丸底の小型甕で、25は器高9.4cmである。26は体部外面にタタキ成形を行い、27は体部内面を刷毛目で仕上げる。28は低い脚台がつく鉢である。体部は内湾して開き、端部は丸く收まる。29はイイダコ壺で、内外面にはオサエの痕跡が残る。30、31は周壁溝から出土したイイダコ壺であるが、欠損しており延縄の孔の存否は明らかではない。32、33、34は集石遺構から出土した。32は土師器羽釜の鶴部である。復元径は42.0cmを測る。33は須恵器甕の口縁部である。短い頸部が緩やかに屈曲し、口縁端部は強いヨコナデで上下に拡張され、端面は凹む。34は土鍤である。外径は5.6cm、内径は1.7cm、現存重量は182gを測る。

SH2002 (第18図、写真図版7)

検出状況 トレンチ32拡張部分東壁に接して検出した。検出時に炭化物がいわゆる放射状に広がっており、焼失住居であることが判明した。住居跡の全容を確認できるまでトレンチを拡張できなかったため、



第18図 SH2002

この住居跡の全掘は行わなかった。そのため柱穴・土坑など床面で検出する施設の状況は不明である。

規模・形態 完全に検出できた北辺の長さは4.8mを測る。住居に設けたセクションで検出した中央土坑の位置から、おそらく正方形プランを持つ住居であると考えられ、そこから予想できる総面積は23m²である。床面から10cmの厚さで炭化物混じりの灰層が堆積している。さらにその灰層上に、炭化物と埴山土をブロック状に含む土が堆積していた。このことからSH2002は焼失後、埋められていたことが判明した。

屋内施設 周壁溝、ベッド状遺構、中央土坑からなる。

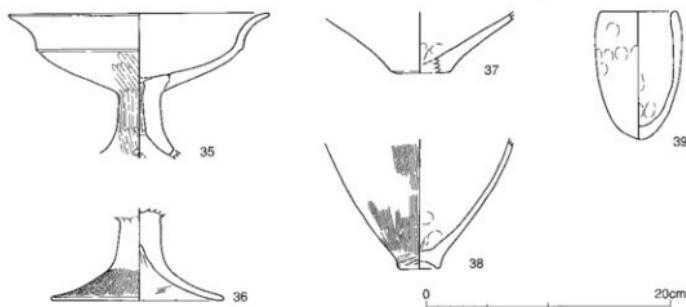
周壁溝 残りのいいところで、幅15cm、検出面からの深さ8cmを測る。検出した辺すべてに周壁溝が認められる。

中央土坑 崩壊状の高まりを持つタイプの中央土坑である。高まりは床面から最大4cmを測る。セクションにおいて中央土坑と考えられる落ち込みを検出したが掘削は行わなかった。

出土遺物

出土状況 住居焼失時に取り残された状況を呈している。埋土に含まれる土器はごくわずかであり、焼失後に土器が廃棄された状況は認められない。

土器 (第19図、写真図版16・17) 35と36は高杯である。35は屈曲する杯部をもつ高杯で、屈曲部がわずかに突出している。杯部と脚部の外面はヘラミガキを行い、脚部には円孔が4箇所設けられている。36は外面を刷毛目で仕上げる。37と38は底部である。38は上げ底で、外面は刷毛目調整である。39は丸底のイイダコ壺である。



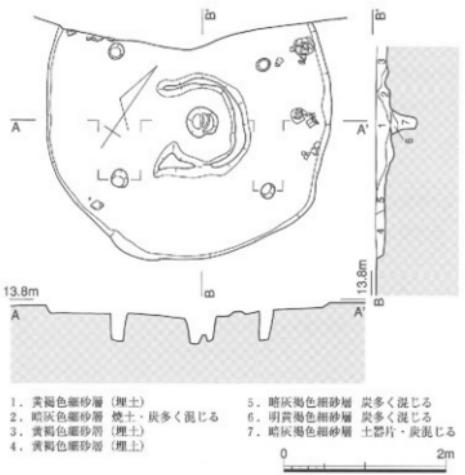
第19図 SH2002出土土器

SH2003 (第20図、写真図版8)

検出状況 トレンチ32で当初は土坑として検出した。トレンチ拡張後に住居跡と認識した遺構である。削平が激しく中央の床面部分のみの検出であった。周壁溝が完全に消失しているため住居の規模は不明である。

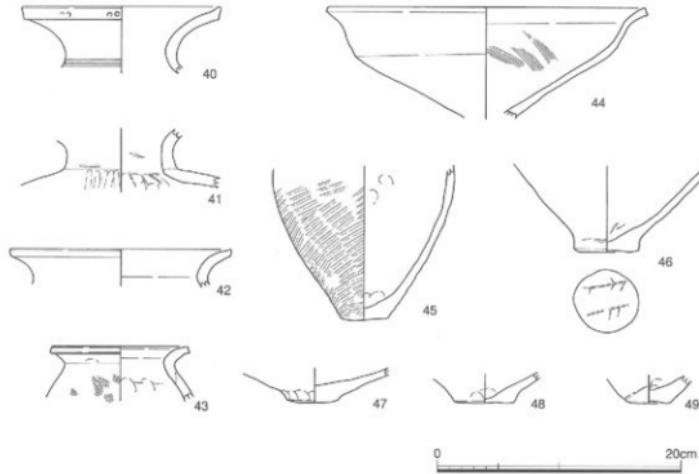
規模・形態 ベッド状遺構をもつ円形の住居跡だと考えられる。検出できた床面は直径3.5mの円形を呈し、面積は9.6m²である。

屋内施設 ベッド状遺構、主柱穴、中央土坑からなる。



第20図 SH2003

には2個1対の竹管文を施す。41は壺の頸部で、外面はヘラミガキ、内面には押さえの痕跡が認められる。42と43は甕で、前者は口縁端部を上方に拡張し、後者は口縁部が肥厚している。44は緩やかに屈曲する杯部をもつ高杯で、口縁端部はわずかに肥厚し、杯部内面には刷毛目が施される。45は右上がりにタキ成形を行う壺体部である。最大径は14.8cmを測る。46から49は底部である。46の底部外面には木葉



第21図 SH2003出土土器

主柱穴 床面において4本検出した。柱間長は長辺1.8m、短辺1.6m。柱穴の直径は20cm、深さ30~40cmを測る。

中央土坑 周堤状の高まりを持つタイプの中央土坑である。周堤の高まりは床面から最大4cmを測る。土坑は上部が直径40cm、下部が直径30cm、深さ30cmの漏斗状を呈している。

出土遺物

出土状況 床面直上において検出した。

土器 (第21図、写真図版17) 40は短い頸部に外反する口縁部がつき、口縁端部を上方に拡張する壺である。

頸部の屈曲部には直線文、口縁端面

痕が残る。

掘立柱建物

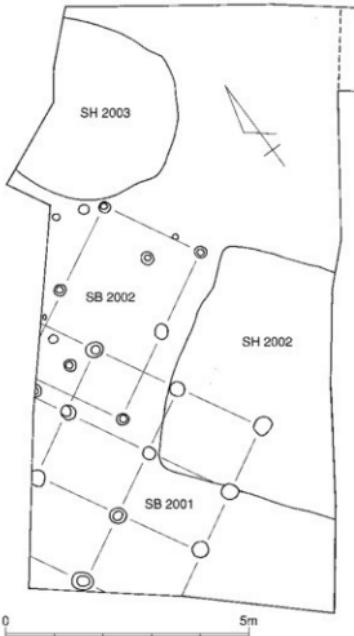
これまでの大中遺跡の調査において、確実に弥生時代の掘立柱建物だといえる建物は確認されていない。今回トレンチ32において比較的のよい柱穴から、2棟の掘立柱建物を復元することができた。しかし、両建物とも全体を検出できなかったため柱穴プランの検出にとどめ、完全な掘削は行わなかった。

S B 2001 3間×3間以上の総柱建物である。柱穴の直径は40cm、南北柱間1.9m、東西柱間1.5mを測る。S H 2002廃絶後に建てられており、弥生時代以降の建物であるが時期の特定はできない。

S B 2002 北西の柱穴がトレンチ外になっているが、おそらく1間×2間の側柱建物であろう。柱穴の直径は20~30cm、南北柱間2.2m、東西柱間1.9mを測り、床面積8.14m²となる。遺物の出土が無く、建物の時期は不明である。

土坑

各トレンチにおいて土坑を検出した。遺構面の削平のため全体像をつかめるものは少ない。その中でも比較的形が残っており、遺物の出土したもののが図化した。



第22図 トレンチ32平面図

S K 1901 (第23図、写真図版10)

検出状況 トレンチ10にて検出した。

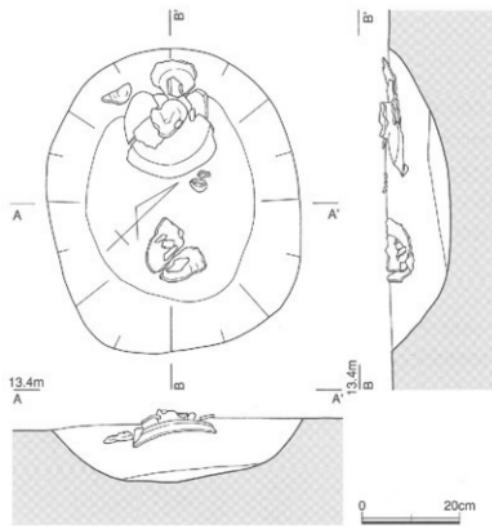
形態・規模 平面の東西に長軸方向をとる。やや隅丸方形に近い楕円形をなす。規模は南北62cm、東西52cmである。壁の立ち上がりは緩やかであり、検出面からの深さは14cmある。

出土遺物

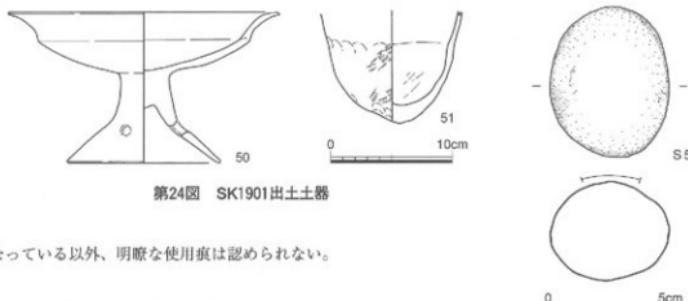
出土状況 土坑の最上面からは須恵器の細片が出土した。しかし、後世の遺構と重複した結果、土坑に混入したものと考えられる。

土器 (第24図、写真図版17) 50は屈曲する杯部をもつ高杯である。杯部は浅く、口縁部は大きく開く。脚柱部は太く、中実である。わずかに屈曲して裾部が開き、円孔を3ヵ所穿つ。51は口縁部を欠損するが、尖底の鉢であろう。外面は弱いタタキの後、ナデを行う。

石器 (第25図、写真図版21) S 5は安山岩製?の磨石である。片面の中央付近が、少し擦れて滑らかに



第23図 SK1901



第24図 SK1901出土土器

なっている以外、明瞭な使用痕は認められない。

S K 1906 (第26図、写真図版10)

検出状況 トレンチ 3 にて検出した土器廐棄坑である。

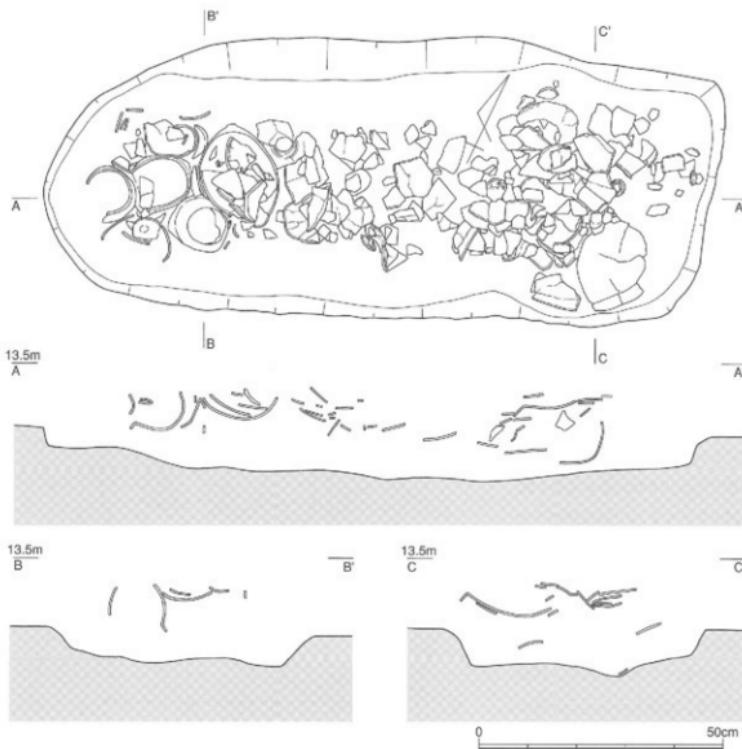
形態・規模 平面は東西方向に長軸をとる。西側部分が丸みをおびた長方形をなす。規模は東西1.37m、南北57cmである。土坑は浅く、最も深いところで検出面から9cmである。底面はほぼ水平をなし、壁の落ちちは急である。

出土遺物

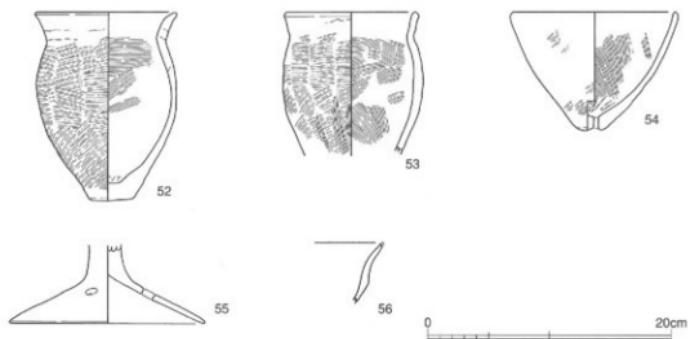
出土状況 土坑の底部から浮いた状態で多くの土器片が出土した。ただし、復元によって全形がうかがい知れる土器は少ない。

土器 (第27図、写真図版18-20) 52と53は壺である。52は厚い平底で倒卵形の体部から緩やかにくの字に屈曲する口縁をもつ壺である。体部外面下半は右上がりタタキ、上半は右上がりと平行タタキ、内面

第25図 SK1901出土石器



第26図 SK1906



第27図 SK1906出土土器

上半は刷毛目を施す。口径11.2cm、器高15.5cmを測る。53は口縁部の屈曲が弱く、わずかに外方に立ち上がる。外面はタタキの後に部分的に縱方向の刷毛目、内面は刷毛目で調整している。54は底部に穿孔を施した有孔鉢である。内湾して体部が開き、外面はタタキ、内面は刷毛目を施す。口径13.3cm、現存高9.7cmを測る。55は中実の脚柱部からわずかに屈曲して柄部が聞く高杯脚部で、円孔を3カ所穿つ。56は高杯杯部の屈曲部破片であろう。

S K1910 (第28図、写真図版11)

検出状況 トレンチ19にて検出した。溝と切り合っている。

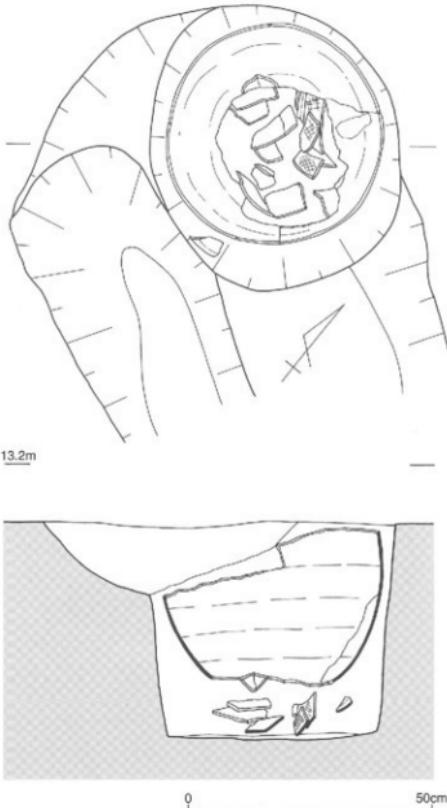
形態・規模 平面形は長径60cm、短径50cmをなす梢円形である。壁は垂直に立ち、深さは検出面より44cmを測る。底面は水平で須恵器を埋め込む為に掘削された土坑である。

出土遺物

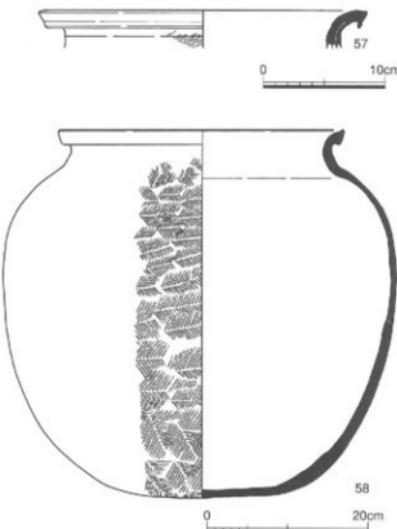
土器 (第29図、写真図版18・20)

57と58はいわゆる東播系須恵器壺である。57は屈曲して聞く頸部から面をもつ口縁部が下方に垂下した壺である。頸部外面には部分的に平行タタキを施し、口縁部はヨコナデである。焼成は良好である。58は土坑内に据え置かれていた壺である。体部は大きくは張り出さず、底部はわずかな丸底である。口縁部は肥厚し、わずかに上方につまみ上げられる。体部外面は綾杉タタキを明瞭に残すが、内面は不明。焼成はきわめて不良である。口径35.0cm、器高45.2cm、体部径48.5cmを測る。

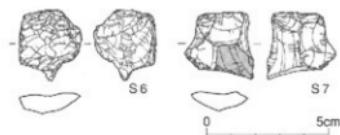
石器 (第30図、写真図版21) S 6は抉入石器で、やや質の悪い緑灰色のチャートを使用している。背面側の末端近くに、抉入状の刃部を作り出している。打面側にも若干の二次加工が施されているようであるが、背面構成面と区別しがたく、刃部を意



第28図 SK1910



第29図 SK1910出土土器



第30図 SK1903ほか出土石器

識したものではないようである。S 7は良質の赤チャート製の石核である。剥片を素材としており、図左面に主剥離面が一部残存している(網掛け部分)。石核としての最終剥離は主剥離面と同一側にあるが、背面側の剥離面も大部分が剥片剥離によって生じたものである。素材剥片の表裏を使い、多方向から剥片の剥離を行っている。腹面側の右側縁には微細な剥離痕が連続しており、最終的には削器として使用されたものと考えられる。

SK 2012 (第31図、写真図版11)

検出状況 トレンチ21にて検出した。

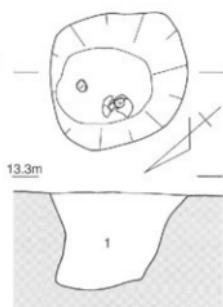
形態・規模 平面は長径57cm、短径54cmの隅丸方形に近い楕円形をなし、検出面からの深さは40cmを測る。埋土は1層からなり、土器は床面直上で検出した。

出土遺物

土器 (第32図、写真図版19・20) 59は屈曲の弱い楕円形の高杯で

認識したものではないようである。

S 7は良質の赤チャート製の石核である。剥片を素材としており、図左面に主剥離面が一部残存している(網掛け部分)。石核としての最終剥離は主剥離面と同一側にあるが、背面側の剥離面も



1. 明褐色シルト質極細
土器片・炭化物含む(埋土)

0 50cm

第31図 SK2012

ある。摩滅が著しく、調整は不明である。60は内湾して開く高杯脚部で、円孔が認められる。61は底部で、上げ底に短い脚台が外方に伸びる。

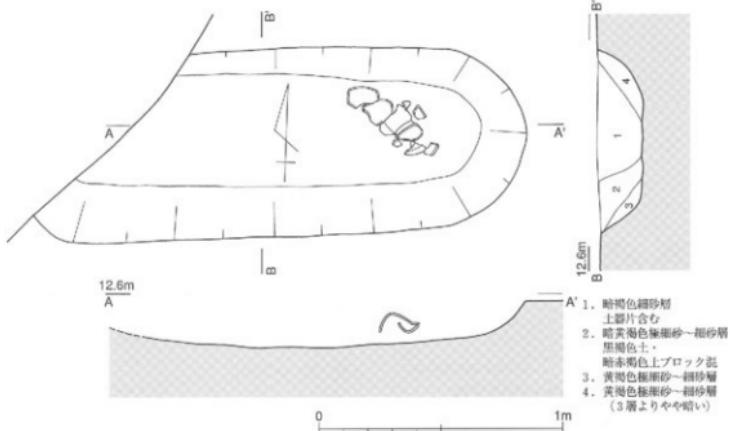
SK2013 (第33図、写真図版12)

検出状況 トレンチ30の壁際で検出した。他遺構との切り合いは認められない。

形態・規模 平面は長さ2m以上、幅77cmの長い楕円形をなす。検出面からの深さは18cmを測る。壁は緩やかに傾斜し、底面はほぼ水平である。断面観察から人為的に埋められた形跡が認められた。



第32図 SK2012出土土器



第33図 SK2013

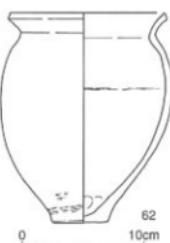
出土遺物

土器(第34図、写真図版19) 62は平底で倒卵形の体部からくの字に屈曲する口縁をもつ壺である。口縁端部は面をなし、上方にわずかにつまみ上げられる。体部外面下半はタタキが認められるが、上半は摩滅のため調整は不明。口径12.5cm、器高17.2cmを測る。

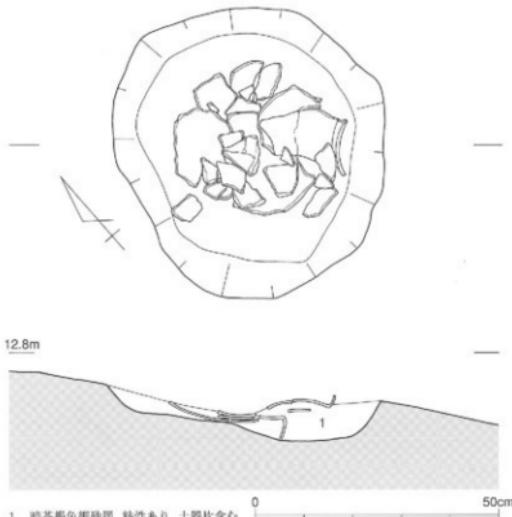
SK2016 (第35図、写真図版12)

検出状況 トレンチ33で検出した。削平が進んでおり、土器出土後に遺構の検出に至った。

形態・規模 平面形は直径55cm前後の円形を呈する。検出面か



第34図 SK2013出土土器

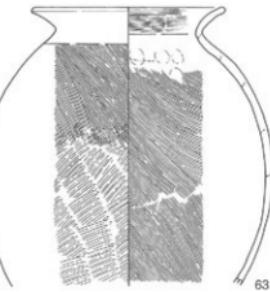


第35図 SK2016

らの深さは9cmを測る。床面は東側がやや落ち込む形状をなし、土器の出土状況から削平された土坑の底部と考えられる。

出土遺物

土器（第36図、写真図版19）63はくの字に屈曲する口縁をもつ壺である。外面は右上がりタタキ成形を行い、上半部は刷毛目で消す。内面は刷毛目で調整している。体部最大径が口径をしのいでいる。64は土師器皿である。底部をナデで仕上げ、口縁部はひずむ。煤の付着が認められる。



SK2019（第37図）

検出状況 トレンチ22で検出した。

形態・規模 平面は直径80cmの円形で、そのまま壺

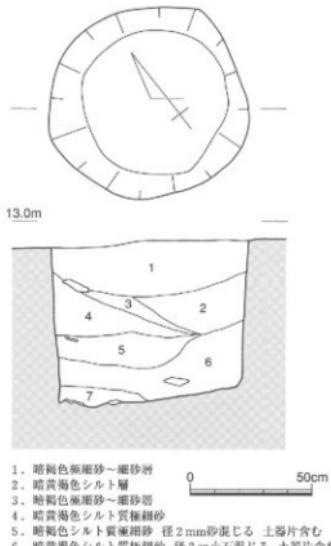
が垂直に落ちる円筒状をなす。検出面からの深さは65cmを測る。埋土はシルト層と砂層が重なりあった7層からなる。6層から土師器小皿が置かれた状態で出土している。堆積した埋土や土師器が置かれていた状況から、SK2019は井戸であった可能性がある。

出土遺物

土器（第38図、写真図版19・20）65と66は土師器羽釜の鶴部である。いずれも鶴部の下方には平行タ



第36図 SK2016出土土器



第37図 SK2019

タキが認められ、外面には煤が付着している。67、68、69は土師器皿である。底部をナデで仕上げている。

S K 2020

検出状況 トレンチ22の南部で検出した。

形態・規模 直径1.6mの緩やかに落ち込む土坑である。トレンチの南端で検出したため、土坑全体の規模は不明であり、図化はしていない。

出土遺物

土器（第39図、写真図版20） 70はいわゆる東播系須恵器捏鉢である。口縁端部を肥厚させ、上方につまみ上げる。焼成は良好である。

P 76

出土遺物

土器（第40図、写真図版20） 71は土師器皿である。底部をナデで仕上げている。



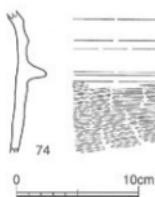
第39図 SK2020出土土器

を新たに設定しその規模を確認した。その結果トレンチ24、26、27、28、31でSD2007を検出した。

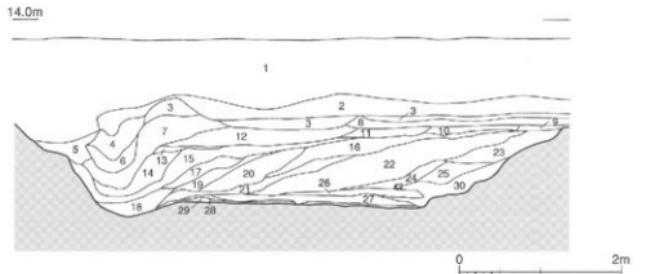
形態・規模 南北幅最大5m、東西幅70m以上、検出面から深さ最大1.5mの大溝である。シルト及び砂層からなる。SD2007はその断面より、溝の北側から埋没していき、途中4回の掘削が行われ、長期間溝として機能していたことが分かる。弥生土器片や、近世の陶磁器片なども出土しており、溝の時期の特定はできない。

出土遺物

土器(第41図、写真図版20) 72は備前焼窯の玉縁口縁である。73は弥生土器窓底部で、外面にタタキがある。74は土師器羽釜の鉢部である。鉢部の下方には横方向の平行タタキ成形が施されている。



第41図 SD2007出土土器



1. 虹色
2. 暗灰色 板細砂～細砂(旧耕作土)
3. 暗赤褐色細砂層(ある時期の盛り土・あぜか)
4. 暗褐色細砂～中砂層 基上
(第9次調査時のトレンチ掘削土)
5. 成土
6. 暗灰白色板細砂層
7. 明灰褐色細砂層
8. 暗灰色 板細砂～細砂
9. 淡白色板細砂層
10. 明灰褐色細砂～細砂層 明黄褐色土ブロック混じる
炭化物混じる
11. 明灰褐色細砂～細砂層 細黄褐色土ブロック混じる
土器片(弥生土器)含む
12. 暗黒褐色細砂層 土器片(弥生土器・須恵器)含む
13. 明灰褐色細砂層 炭化物混じる
14. 暗黒褐色板細砂～細砂層 明黄褐色土ブロック混じる
(約60%) (埋土)
15. 暗褐色細砂～粗砂層 南側はやシルト質
16. 暗褐色細砂～粗砂層 炭化物混じる
17. 暗黄褐色板細砂～細砂層 暗黒褐色土ブロック混じる
土器片含む
18. 暗黒褐色板細砂～細砂層 明黄褐色土ブロック混じる(20%)
土器片含む
19. 暗黒褐色板細砂～細砂層 明黄褐色土ブロック混じる(40%)
土器片含む
20. 明黄褐色細砂層 始褐色土ブロック混じる(40%)
土器片・炭化物含む
21. 暗黒褐色板細砂～細砂層 南側へ行くに従い灰白色に漸移する
22. 暗黒褐色細砂層 明黄褐色土ブロック多く混じる(約70%)
土器片・炭化物含む
23. 暗黄褐色板細砂～中砂層 明黄褐色土ブロック混じる(20%)
24. 暗黒褐色細砂層 灰白色粘土ブロック混じる
25. 暗黒褐色細砂層 明黄褐色土・灰白色細砂ブロック混じる
26. 明茶褐色中砂層 径10～50mmの小石混じる(約10%)
27. 明褐色中砂層 径5～20mmの小石混じる(約30%)
28. 明茶褐色中砂層
29. 暗灰褐色シルト層
30. 暗褐色シルト質板細砂層

第42図 SD2007土層断面図

表2 出土遺物観察表

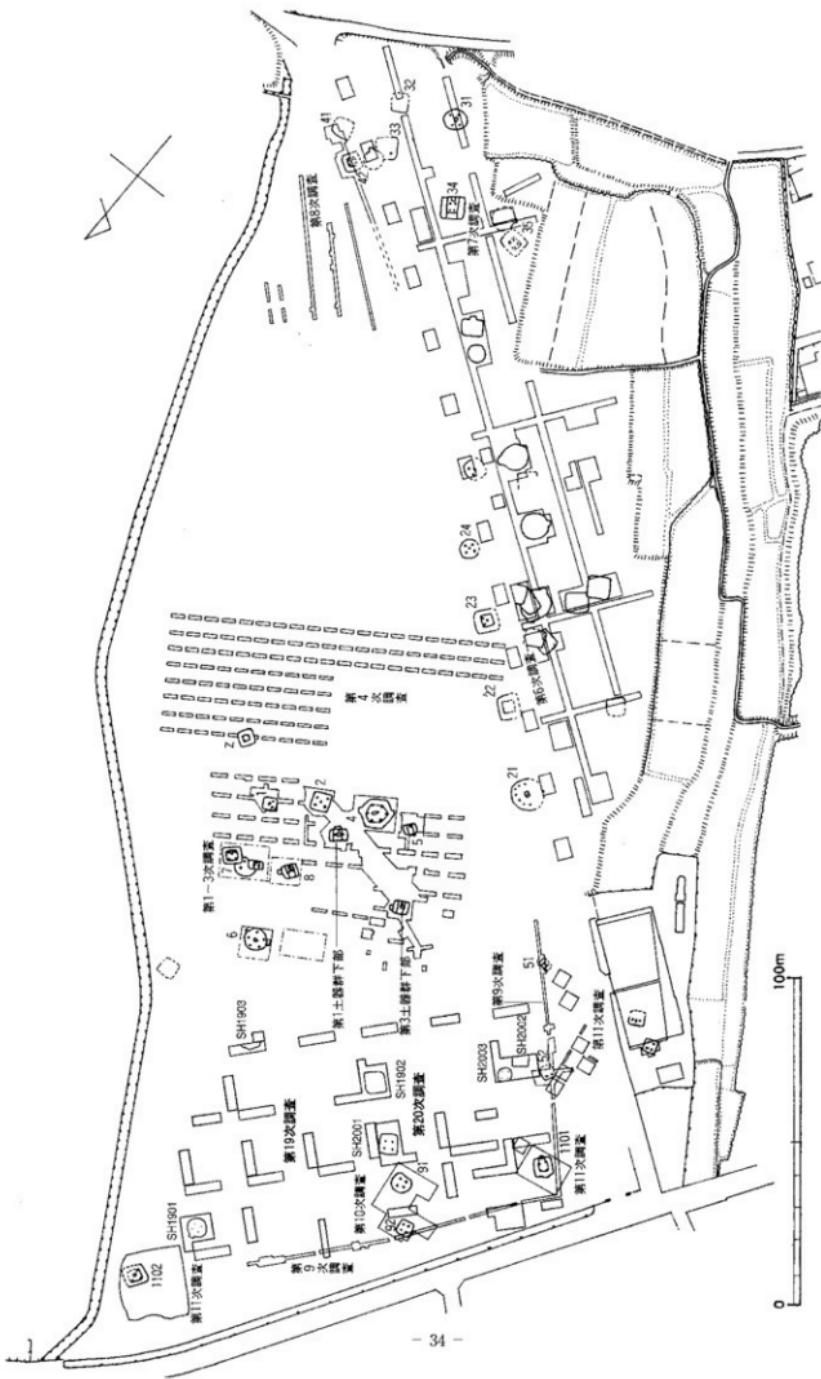
報告 番号	種別	器種	造構	法量			色調	備考	実測 番号
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)			
1	弥生土器	二重口縁壺	SH1901	中央土坑	(19.35)	(6.9)	-	7.5Y7/6 棕	28
2	弥生土器	二重口縁壺	SH1901	中央土坑	(15.6)	(4.1)	-	10YR7/4 にぶい黄橙	25
3	弥生土器	長颈壺	SH1901		-	(8.2)	-	10YR8/3 浅黄橙	30
4	弥生土器	長颈壺	SH1901	中央土坑	(11.2)	(10.5)	-	10YR8/3 浅黄橙	24
5	弥生土器	壺	SH1901	張り出し部	-	(19.4)	-	7.5YR 6/4 にぶい棕	8
6	弥生土器	壺	SH1901		(30.0)	(2.2)	-	10YR6/2 深黄橙	31
7	弥生土器	高杯	SH1901		(17.6)	(5.6)	-	10YR8/2 灰白	7
8	弥生土器	壺	SH1901		-	(8.5)	-	10YR7/6 にぶい黄橙	32
9	弥生土器	壺底部	SH1901		-	(4.0)	8.2	7.5YR 7/4 にぶい棕	15
10	弥生土器	底部	SH1901	中央土坑	-	(2.0)	5.1	2.5Y7/3 浅黄	26
11	弥生土器	底部	SH1901	中央土坑	-	(2.4)	4.8	7.5YR7/6 棕	本無痕 23
12	弥生土器	イイダコ壺	SH1901		5.0	9.3	4.5	10YR 8/4 浅黄橙	9
13	弥生土器	イイダコ壺	SH1901		(4.8)	(11.1)	-	2.5Y 8/3 淡黄～ 7.5YR 6/6棕	10
14	弥生土器	イイダコ壺	SH1901		(5.5)	12.3	-	10YR 7/2 にぶい黄橙	13
15	弥生土器	底部	SH1901	中央土坑	-	(3.05)	2.5	2.5Y7/3 浅黄	27
16	弥生土器	底部	SH1901		-	(2.65)	2.95	7.5YR5/4 にぶい褐	29
17	弥生土器	高杯	SH1902a		14.0	(7.0)	-	5YR7/6 棕	1
18	弥生土器	高杯	SH1902b		-	(6.4)	(12.1)	10YR7/4 にぶい黄橙	2
19	弥生土器	ミニチュア瓶	SH1902b		5.0	5.05	4.0	10YR7/3 にぶい黄橙	3
20	弥生土器	壺	SH1903		-	(6.05)	-	10YR6/4 にぶい黄橙	6
21	弥生土器	壺底部	SH1903		-	(6.05)	3.2	10YR7/4 にぶい黄橙	5
22	弥生土器	壺	SH2001 c	張出部土坑	14.8	23.2	5.3	10YR8/3 浅黄橙	75
23	弥生土器	壺	SH2001 c	張出部土坑	(13.7)	(9.5)	-	10YR7/3 にぶい黄橙	40
24	弥生土器	壺	SH2001 c	張出部土坑	(13.4)	(8.2)	-	10YR8/3 浅黄橙	45
25	弥生土器	壺	SH2001 c	張出部土坑	(10.8)	9.4	-	2.5Y8/3 淡黄	35
26	弥生土器	壺	SH2001 c	張出部土坑	(13.0)	11.8	-	10YR7/2 にぶい黄橙	44
27	弥生土器	壺	SH2001 c	張出部土坑	10.0	13.0	-	2.5Y8/2 灰白	36
28	弥生土器	鉢	SH2001 c	張出部土坑	11.4	6.7	3.8	7.5YR6/4 にぶい棕 (内：2.5Y4/1 黄灰)	46
29	弥生土器	イイダコ壺	SH2001 c	張出部土坑	6.9	9.1	-	10YR7/4 にぶい黄橙	37
30	弥生土器	イイダコ壺	SH2001 c	刻墨溝	(3.8)	8.1	-	10YR8/4 浅黄橙	39
31	弥生土器	イイダコ壺	SH2001 c	刻墨溝	(5.4)	11.3	-	10YR8/4 浅黄橙	38
32	土器類	羽蓋	SH2001	集石造構	(42.0)	(3.7)	-	10YR8/2 灰白～ 10YR6/3にぶい黄橙	41
33	須恵器	壺	SH2001	集石造構	(17.2)	(4.0)	-	N5/灰	43
34	土製品	土鍤	SH2001	集石造構	2.6	(9.1)	5.6	7.5YR8/3 浅黄橙	(182g) 42
35	弥生土器	高杯	SH2002		(21.2)	(12.0)	-	10YR7/3～6/3にぶい黄橙	54
36	弥生土器	高杯	SH2002		-	(7.5)	(13.9)	7.5YR8/4 浅黄橙	50
37	弥生土器	壺底部	SH2002		-	(5.0)	(5.0)	5YR7/1 にぶい棕 (内：2.5Y3/1 黑褐色)	51
38	弥生土器	壺底部	SH2002		-	(10.6)	3.6	10YR6/3 にぶい黄橙	56
39	弥生土器	イイダコ壺	SH2002		(6.0)	10.5	-	7.5Y7/6 棕	55
40	弥生土器	壺	SH2003		(16.0)	(5.5)	-	10YR7/4 にぶい黄橙	47
41	弥生土器	壺	SH2003		-	(4.9)	-	7.5YR6/4～5YR6/3にぶい棕	58
42	弥生土器	壺	SH2003		(18.0)	(3.1)	-	10YR7/4 にぶい黄橙	49
43	弥生土器	壺	SH2003		(11.0)	(4.5)	-	10YR7/3 にぶい黄橙	53
44	弥生土器	高杯	SH2003		25.9	9.5	-	7.5YR7/4 にぶい棕	57

() は残存個数

報告 番号	種別	器種	造構	法量			色調	備考	実測 番号
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)			
45	弥生土器	甕	SH2003	—	(12.7)	3.8	7.5YR6/3 にぶい褐		69
46	弥生土器	底部	SH2003	—	(7.0)	5.2	7.5YR7/4 にぶい橙	木葉底	70
47	弥生土器	底部	SH2003	—	(2.9)	4.3	5YR6/6 橙 (内: 5Y4/1灰 外: 5YR7/8橙)		71
48	弥生土器	底部	SH2003	—	(2.5)	4.9	内: 5Y4/1灰 外: 5YR7/8橙		48
49	弥生土器	底部	SH2003	—	(2.3)	3.6	7.5YR7/4 にぶい橙 (内: 2.5Y8/2灰)		52
50	弥生土器	高杯	SK1901	(22.0)	12.4	(12.5)	10YR7/3 にぶい黄橙		11
51	弥生土器	鉢	SK1901	—	(9.3)	—	10YR8/3 浅黄橙		12
52	弥生土器	甕	SK1906	(11.2)	15.5	3.8	10YR7/4 にぶい黄橙		19
53	弥生土器	甕	SK1906	(10.3)	(11.8)	—	10YR7/3 にぶい黄橙		21
54	弥生土器	有孔鉢	SK1906	(13.3)	9.7	2.5	7.5YR7/4 にぶい橙		18
55	弥生土器	高杯	SK1906	—	(6.4)	(16.0)	7.5YR7/6 橙		17
56	弥生土器	高杯	SK1906	—	(4.8)	—	5YR6/6 橙		20
57	須恵器	甕	SK1910	(25.5)	(3.05)	—	NS/灰		22
58	須恵器	甕	SK1910	(35.0)	45.2	—	2.5Y8/2灰白～6/2灰黄		34
59	弥生土器	高杯	SK2012	(10.8)	(5.9)	—	2.5Y7/3 浅黄		60
60	弥生土器	高杯	SK2012	—	(5.1)	—	10YR7/4 にぶい黄橙		61
61	弥生土器	底部	SK2012	—	(3.45)	(6.05)	7.5YR7/6 橙		59
62	弥生土器	甕	SK2013	(12.5)	(17.2)	4.7	2.5Y7/3 浅黄		73
63	弥生土器	甕	SK2016	15.3	(22.85)	—	5YR7/6 橙		74
64	土師器	小皿	SK2016	12.25	3.5	8.5	2.5Y8/2 灰白		62
65	土師器	羽釜	SK2019	—	(6.15)	—	5YR6/6 橙		68
66	土師器	羽釜	SK2019	—	(7.9)	—	5YR6/6 橙		66
67	土師器	皿	SK2019	8.4	1.5	6.45	2.5Y8/2 灰白		65
68	土師器	皿	SK2019	12.35	2.4	8.9	10YR7/4 にぶい黄橙 (部分的に2.5Y6/6橙)		64
69	土師器	皿	SK2019	(12.6)	2.5	(8.4)	7.5YR7/4 にぶい橙		63
70	須恵器	控鉢	SK2020	—	(3.5)	—	N6/灰		67
71	土師器	皿	P76	(12.3)	2.5	—	10YR8/2 灰白		76
72	彫前鏡	甕	SD2007	(41.0)	(5.5)	—	2.5Y4/1 黄灰 (中: 7.5YR5/2灰褐)		78
73	弥生土器	底部	SD2007	—	(2.2)	—	10YR6/3にぶい黄橙 (外: 5YR6/4にぶい橙)		72
74	土師器	羽釜	SD2007	—	(11.7)	—	5YR7/6 橙		77

報告番号	種別	石材	出土基構	法量			
				幅(mm)	長(mm)	厚(mm)	重さ(g)
S1	剥片	サヌカイト	SH1901	30.5	23.0	4.6	3.6
S2	剥片	サヌカイト	SH1901	20.9	36.5	8	8.1
S3	ナイフ形石器	サヌカイト	SH1901	39.4	69.9	14	37.1
S4	剥片	赤チャート	SH1902	18.9	24.0	5.45	2.7
S5	磨石	安山岩?	SK1901	48.5	62.0	40.5	188.7
S6	抉入石器	チャート	M25	25.5	29.0	0.85	6.7
S7	石核	赤チャート	SK1903	28.2	27.5	8.2	6.5

第43図 第1~11次・19~20次調査全体図



第4章　まとめ

第1節 第19次・20次調査の成果

今回の発掘調査により、旧石器時代から鎌倉時代にかけての各時期の遺構、遺物を確認したが、本調査の目的は弥生時代集落の内容の把握にあるため、弥生時代の遺構、遺物の調査成果を中心にまとめておく。

(1) 遺構の構成について

大中遺跡ではこれまでに弥生時代の遺構が多く調査されているが、堅穴住居以外にめぼしい遺構ではなく、集落構造の全容が不明なままであった。このため今回の調査の目的のひとつは掘立柱建物などの遺構を探索することであった。しかし調査の結果、堅穴住居と土坑（最終的には廐棄土坑として使用）などを確認し、これまでの調査結果を追認する結果に終わった。

集落の構成要素として掘立柱建物が欠落しているのか、それとも堅穴住居とは別の場所に占地しているのか、遺跡全体の調査がすむまでは結論は出ないが、少なくとも第19次・20次調査で調査した範囲については、弥生時代の掘立柱建物が存在する可能性は低いと言わざるをえない。

(2) 堅穴住居について

今回の調査で新たに6棟の堅穴住居を確認したが、SH1901のようにこれまで未確認の新たなタイプの堅穴住居を確認したほか、SH1902・SH2001では堅穴住居の拡張・切り合いの関係から、堅穴住居の構造・形態の変化が追える資料が得られた。これらの資料はこれまでの大中遺跡における堅穴住居の変遷を見直す上で鍵になるものであり、堅穴住居の研究上重要な発見である。

(3) 遺物について

弥生時代の遺物としては、土器・石器が出土している。土器の中ではSH2001cの土坑出土土器が、良好な一括資料としてあげられる。庄内式系統の甕を含む土器群であり、山本三郎氏の編年の大中Ⅲ式に相当するものである。

またこれまでの調査でも顕著であった漁労具の出土の多さが確認できたことも成果である。イイダコ壺、土錘などが多く出土しており、この集落の主要な生産活動のひとつが漁労であったことを強く示すものであろう。

土器の豊富さに比べてそれ以外の遺物はわずかしか出土していない。金属製品は今回の調査でも出土しておらず、この集落の金属器の保有状況を具体的に示す証拠は得られなかった。

(4) 集落構造について

今回の調査で、遺跡西部についても堅穴住居が建ち並ぶ居住域であることが明らかになった。まだ一部に未調査の範囲が残り、さらに西側の加古川市域については全く遺跡の内容は不明のままであるが、史跡指定範囲については、集落構造を考えることができる材料が揃ったと言えよう。詳細については次節で述べることとする。

第2節 大中遺跡の再検討

(1) はじめに

大中遺跡については平成2年に『播磨大中遺跡の研究』が刊行され、1次～11次にわたる調査の成果がまとめられている。この報告書は大中遺跡の研究を進める上での基本文献となるが、刊行後10数年が経

過して遺構の年代観について再検討が必要となっている。大中遺跡の全体像を改めて復元するために、これまでの調査成果と今回の調査成果をあわせて大中遺跡について再検討をおこなう。

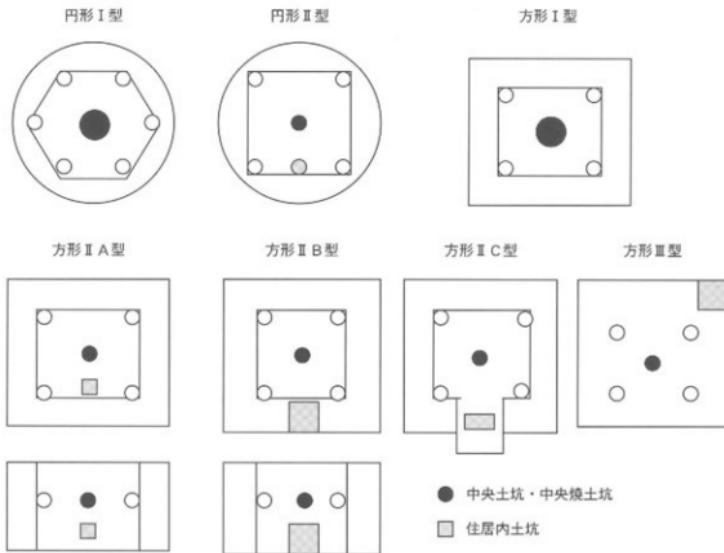
今回の再検討は、大中遺跡の集落景観と人々の生活の復元を目的とする。このために、竪穴住居の再検討をおこない、集落構造の変遷を明らかにし、大中遺跡の生業について検討をおこなう、という手順で検討を進める。

(2) 竪穴住居の編年の一再検討

1 検討の視点

弥生時代～古墳時代の竪穴住居は、1990年代の大規模調査によって、調査例が莫大な数にのぼっている。これらの調査結果から、竪穴住居の時間的な変遷や地域的な個性について次第に明らかになりつつある。東播磨においても明石川流域（神戸市西区）での大規模調査によって、数百棟にのぼる弥生時代～古墳時代の竪穴住居が調査されている。この中でも最も資料が豊富な玉津田中遺跡では、弥生時代前期～古墳時代後期の竪穴住居の検討の結果、その変化は平面形・柱穴・燃焼施設・屋内施設の組み合わせによって整理でき、それぞれが相関して変化することがあきらかになっている。（兵庫県教育委員会 1996）

『播磨大中遺跡の研究』では円形住居→方形住居→長方形住居→方形住居（古墳）というふうに平面形が変遷すると述べられているが、玉津田中遺跡などでの検討により、(1) 円形・方形の住居は併存すること、(2) 方形住居と長方形住居は併存すること、が明らかになっている。以下、これらの成果をもとに大中遺跡の竪穴住居の変遷を再検討する。



第44図 竪穴住居の型式分類

2 壇穴住居の型式

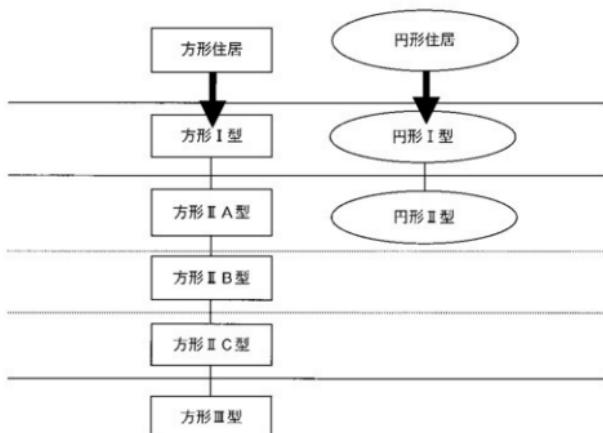
型式分類 平面形、主柱数、住居内施設により分類する。

型式組列 大中遺跡においては多様な形態の壇穴住居が検出されており、二つとして同じ住居はないと言える。しかし玉津田中遺跡における研究成果を参考にすれば、これから型式組列を構築できる。

円形もしくは方形で中央土坑やベッド状遺構をもつタイプは弥生時代後期のものである可能性が高い。

また中央焼土坑をもち、北東隅に住居内土坑をもつものは古墳時代前期のものである可能性が高い。

これ以外の中央焼土坑をもち、南側中央部に住居内土坑をもつタイプは、弥生時代後期と古墳時代前期の間、弥生時代終末期に属する可能性が高いであろう。また住居内土坑が壁と中央焼土坑の間に位置するものは、弥生時代後期タイプからの過渡期のものである可能性が高い。



第45図 壇穴住居の型式組列

3 壇穴住居の時期の検証

型式組列が正しいかどうか、各型式の帰属時期について検討をおこなうと以下のとおりになる。なお土器の編年は『播磨大中遺跡の研究』における山本三郎氏の編年に従った。また時期区分は、土器編年のI型式の存続時期をひとつの時期として便宜的に扱い、大中Ⅰ式の存続期間を1期、以下Ⅱ式を2期、Ⅲ式を3期、Ⅳ式を4期と対応させている。

まず各壇穴住居から出土している土器の時期については、表3のとおりである。ただし出土土器が示す時期は、住居の廃絶後に住居跡の底みに土器が投棄された時期を示すものであり、壇穴住居が存続していた時期をそのまま示すものではない。この点を考慮すれば、型式組列はほん時間の流れと対応したものである。

円形Ⅰ型は1期～2期まで存続し、3期には円形Ⅱ型と交代する。方形Ⅰ型は円形Ⅰ型と同時に存在し、2期の中で方形ⅡA型、ⅡB型と交代する。ⅡA型はⅡB型よりも先に1期の後半には出現している。方形ⅡA型は3期には姿を消し、方形ⅡB型は4期まで存続する。3期には新たに方形ⅡC型が出

表3 遺構別出土土器

	遺構名	上層型式	遺構の時期	要	収	鉢	高杯	器台									
		V様式系発	庄内式系発	長颈壺	広口壺	直口壺	分離鉢	有孔鉢	脚台付鉢	手あぶり鉢	丸底鉢	V様式系高杯	布袋庄内系高杯	普通祭台	小型祭台	有段装飾祭台	
円形I型	6号住	II	2														
	21号住	II	2														
	4号住	I	1														
	31号住	I	1														
円形II型	91号住	III	3														
円形その他	7A号住	II	2														
	24号住	II	2														
	42号住	II	2														
方形I型	23号住	I	1														
	Z号住	III	1~2														
方形II A型	1102号住	II	2														
	第3上層群下部住	I	1														
	第1上層群下部住	II	2														
方形II B型	7C号住	III	3														
	1号住	IV	4														
	5号住	II	2														
	7B号住	II	2														
	8号住	II	2														
	34号住	IV	4														
	52号住	III	3														
方形II C型	1101号住	III	3														
方形III型	92号住	IV	4														
	2号住	IV	4														

表4 各型式の存続時期

時期(土器型式)	1期(大中I式)	2期(大中II式)	3期(大中III式)	4期(大中IV式)
円形I型				
円形II型				
方形I型				
方形II A型				
方形II B型				
方形II C型				
方形III型				

現し、4期まで継続するが、4期には方形Ⅲ型が主流となる。

(3) 各段階の遺構分布の検討

各堅穴住居の時期に基づき、各時期の遺構分布を検討すると以下の図のようになる。ただし旧別府鉄道より南側の地区については、検出をおこなっているだけで、遺構の掘削はおこなっていないので各住居跡の時期は確定できない。住居の形態からは大中Ⅰ式～大中Ⅳ式の各時期の住居が存在するようである。

1期（大中Ⅰ式） 第46図

堅穴住居は集落の全域に分布している。住居の平面形は円形と方形があり、大型の住居は円形もしくは多角形となる。各住居は20～30mの間隔をおいて分布している。同時期に存在する住居は時期の確定したものは7棟であるが、未調査範囲や時期の未定のものを含めると最低この倍程度、15棟以上存在したと推定できる。

2期（大中Ⅱ式） 第47図

堅穴住居は集落の全域に分布している。住居の平面形は円形と方形がある。この時期は、土器編年上では新古の2段階に分かれ、他の時期に比較して設定している時間幅が長い可能性が高い。このためこの時期に比定される住居が全て同時に存在したわけではない。大きくは円形住居が優勢な時期と方形住居が優勢な時期に分かれるであろう。この点を考慮すると、住居の分布や、同時期に存在する住居の数は1期とはさほど変わらないと考える。

3期（大中Ⅲ式） 第48図

堅穴住居は集落の北西に集まる。未調査地区や時期未定のものの中にこの時期の住居が存在する可能性もあるが、住居の分布の中心が北西にあるのは確実である。この時期に比定できる住居は5棟のみであり、同時に存在したものは最大でも10棟程度であろう。2期に比べると、集落規模は縮小する傾向にあると言えるだろう。

4期（大中Ⅳ式） 第49図

堅穴住居は3期同様、北西に集まるが、東側にも存在する。大きな傾向としては3期とほぼ同じである。

以上から言えることは、

- 同時期に存在する堅穴住居は10～15棟程度と考えられる。
- 集落の西側に住居が集まる傾向があるが、中心部が西側にあることを示すものと考えられる。
- 史跡指定範囲内は全て居住域であり、墓域や生産域は含まれていない。

(4) 大中遺跡集落構造の復元

大中遺跡ではこれまでに弥生時代～古墳時代初頭の堅穴住居・溝・土坑などが調査されているが、少なくとも史跡指定範囲内では、方形周溝墓などの墓は全く検出されておらず、水田などの生産遺構も全く検出されていない。

弥生集落を構成する、居住域・墓域・生産域のうち、居住域以外は全く不明であり、周辺部への調査が及んでいない現状では推測の域をでるものではないが、墓域・生産域についても現時点での可能性を考えてみる。

居住域

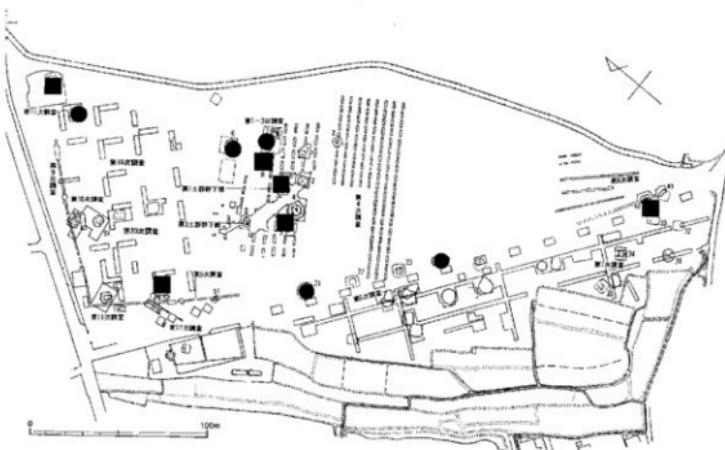
各時期の堅穴住居の分布を詳細に検討すると、近接した範囲内で1～4期の各時期の堅穴住居が検出

1期（大中Ⅰ式）



第46図

2期（大中Ⅱ式）



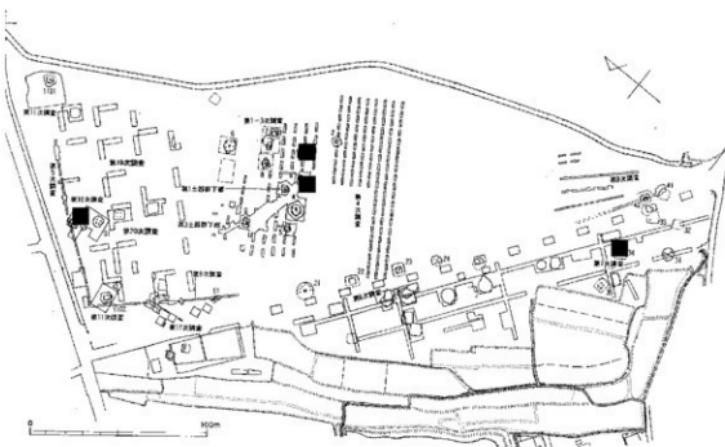
第47図

3期（大中Ⅲ式）

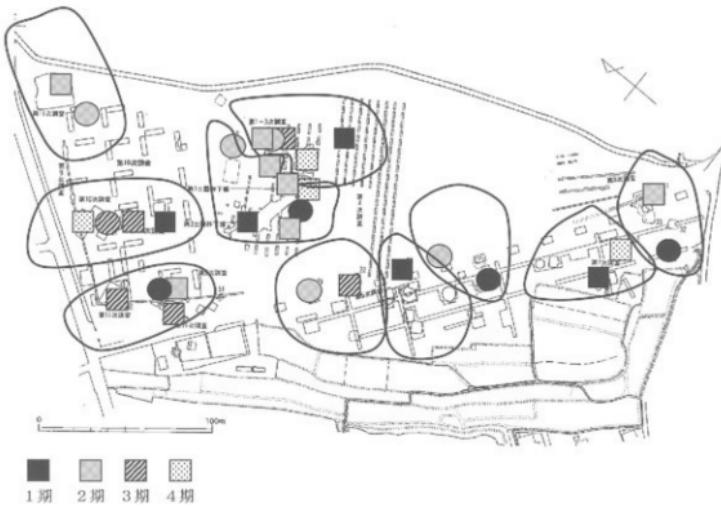


第48図

4期（大中Ⅳ式）



第49図



第50図 壑穴住居のグルーピング

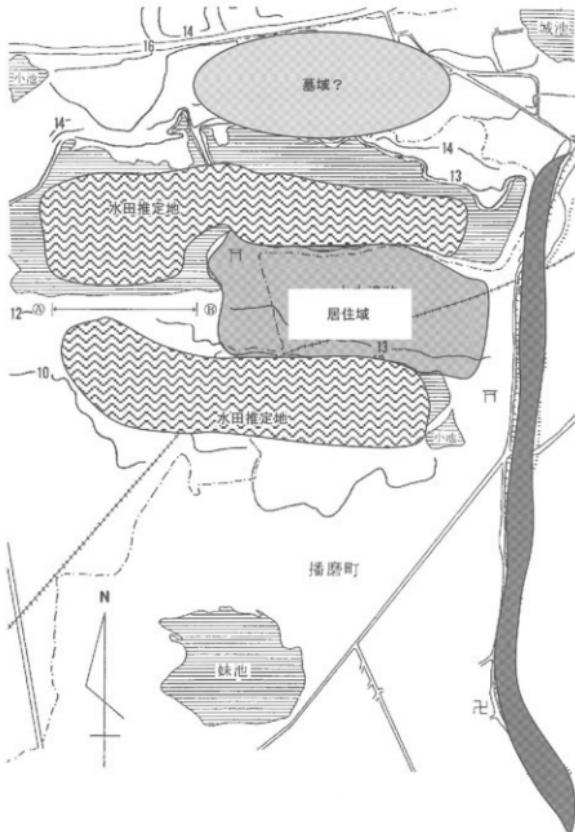
されており、時期によって大きく集落の中心が移動するという現象は見られない。基本的に1期の壧穴住居が造られたあとは、それに近接した場所で2期以降の壧穴住居が継続的に建てられている様子がうかがえる。のことから、特定の壧穴住居に居住する単位は集落内の特定エリアを排他的に占有し、このエリア内で継続して住居の建て替えをおこなった可能性が推測できる。

墓域

現在までに播磨地域において弥生時代の当該期の墓が調査されている例はさほど多くない。これまでに知られているものとしては、赤穂市有年・原田中遺跡のものを代表とする円形周溝墓、掛保川町半田山墳丘墓や加古川市西条52号墓などを代表とする墳丘墓があげられる。ただし墓の調査例は西播磨地区に偏っており、大中遺跡が所在する東播磨地区では弥生時代後期～古墳時代初頭の墓制については手がかりがほとんどない。

高密度で弥生時代集落の調査が行われている明石川流域でも、神戸市日輪寺遺跡や池上口ノ池遺跡、吉田南遺跡など、大中遺跡と同時期の集落遺跡が多数調査されているにもかかわらず、墓域は全く検出されていない。集落に隣接して墓域が検出されないとすると、丘陵上の墳丘墓の存在が考えられるが、今までのところ丘陵上でも墓は未発見であり、具体的な墓制は見えてこない。

大中遺跡で、あえて墓域の立地する場所を求めれば、集落周辺の耕作不能地、当時にあっては「山」と認識されていた土地が考えられる。やや時期は下がるが、愛宕塚古墳の立地を考えると、大中遺跡と同じ段丘Ⅱ面・砂堆帯の上に墓域が存在することは十分に考えられる。



第51図 大中遺跡の集落構造

生産域

遺跡周辺に広がる水田は、近世以降の新田開発によるものであり、古代までは原野であった可能性が高い。水の乏しい段丘上は、畑作は可能であるが、水田を求めるなら、段丘の間の谷地に求めざるをえない。遺跡近辺では、濱目池が造られている谷もしくは南側の狐ヶ池が造られている谷に適所を求めることができる。しかしこの部分だけでは、わずかな収量しか期待できないため、集落から離れた場所にも生産城を確保していた可能性はある。谷地以外では、遺跡からは離れるが、喜瀬川の下流域の扇状地か、砂堆に沿った後背湿地が可耕地となる。大中遺跡からのタコツボの出土が示すように、大中村の住人は海岸部まで生活領域としており、集落近辺で可耕地を求めなくても、約2km離れた海岸部に可耕

地を想定することも可能ではないだろうか。

（5）大中遺跡における生業をさぐる

『播磨大中遺跡の研究』において、高橋学氏が地形環境を中心に大中遺跡の周辺環境と生業について述べており、この研究成果や、近隣の遺跡である神戸市西区玉津田中遺跡の調査成果を参考に大中遺跡の生業について考えてみよう。

農耕

水田の推定地については先に述べたとおりであり、畑作地の可能性については、段丘上の任意の場所で耕作が可能であろう。住居の周囲の空閑地も畑地として利用されていた可能性が考えられる。神戸市西区玉津田中遺跡のデータでは、弥生時代後期にはマメ類などの畑作物の栽培が行われていたことが明らかになっている。しかしその具体的な証拠となる農具などの生産用具については、既に石器が消滅して鉄器が普及している段階であり、木製品は皆無・鉄製品は微量しか出土していないため、実態は明らかでない。農耕に関しては、「弥生集落であるから、当然していたはず」との、一般常識からの類推以外には根拠は乏しいのが実情である。

狩獵

大中遺跡の周辺は広く開けた原野であり、その背後には照葉樹林が広がっていたと推定されるが、そこにはシカ、イノシシなどの動物が生息していたであろう。神戸市西区玉津田中遺跡では、弥生時代中期のニホンジカ・イノシシ・イヌの骨が多く出土しており、イヌを用いてシカ・イノシシを追う狩猟が盛んに行われていたことが判明している。同様な環境に位置する大中遺跡でも、狩猟は主な生業のひとつであったことであろう。ただし、鉄鎌など具体的な狩猟の道具は出土していない。

漁労

大中遺跡からは約3kmで海岸に出るが、海は大中村の主要な生産の場であった。多くのイイダコ壺や土錐の出土がそれを物語っている。イイダコ以外はどのような魚を捕獲していたのか、定かではないが、玉津田中遺跡の例を参考にすると、スズキ・マダイ・ハモ・サメなど、様々な魚を捕獲していたと推定できる。

採集

大中遺跡では、植物遺体が出土していないため、具体的な植物利用の状況は不明である。しかし近隣の玉津田中遺跡の出土資料を参考にすれば、ブドウ、サンショウウ、ヤマモモなどの採集をおこなっていたことが推測できる。シイやカシなどの堅果類の利用は、弥生時代から古墳時代に向かって次第に減少してゆくことが判明しているが、大中遺跡からは台石や磨石など、堅果類の利用のための生産用具が出土しているので、弥生時代中期から引き続き、ドングリ類の利用は行われていたようである。

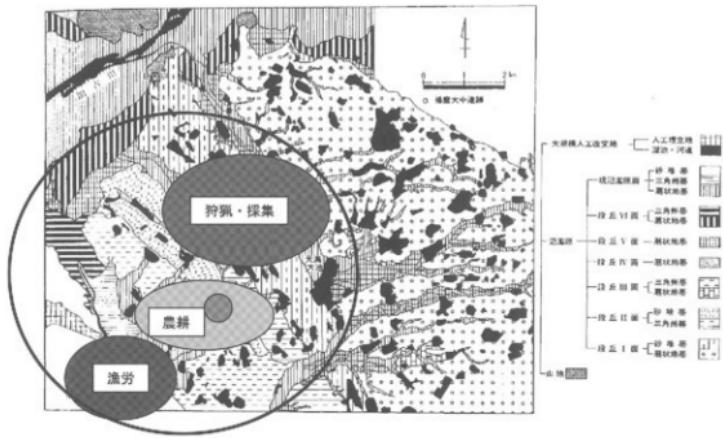
その他の生産活動

大中遺跡における手工業生産については資料が乏しいが、可能性のあるものを列挙しておく。

紡織 紡錘車が出土しており、糸の生産、織物の生産をおこなっていたことが推測できる。素材についての具体的な資料は得られていない。

鍛冶 全く関連遺物の出土はないが、石製利器の出土がないことから鉄器の使用が恒常化していたことは間違いない、簡単な鍛冶程度は行われていた可能性がある。

鋳造 玉津田中遺跡では弥生時代後期に青銅器生産を行っていた可能性が極めて高い。大中遺跡でも、



第52図 大中遺跡住人の活動領域

第7A号住居の「床面直上の薄い灰層から」内行花文鏡の破鏡が出土しており、これらを鋳つぶして銅鏡等に再生していた可能性もある。

製塩 大中遺跡では製塩土器の出土はないが、大中遺跡の時期は大阪湾岸や播磨灘沿岸で土器製塩を開始している時期であり、イイダコ漁などで海を生産活動の舞台としていた大中村の住人が土器製塩をおこなっていた可能性もある。

土器づくり 弥生時代後期の土器は遺跡毎の変異が大きく、中期の齊一性とは対照的な様相を見せるので、土器作りは集落単位でおこなわれた可能性が考えられる。

(6) 弥生時代の大中遺跡

以上のように大中遺跡は、農耕に基盤をおきながらも、漁労や狩猟採集などにも従事する集落であり、弥生時代後期に始まるフロンティアを求めて開発された新しい集落群のひとつであると考えられる。この類型の集落の特徴として以下のことがあげられよう。

- ① 段丘上など、前時期には開発の対象となていなかった場所に立地する。
- ② 弥生時代後期後半に発達し、古墳時代前期には衰退する。
- ③ 住居の建て替えが頻繁におこなわれ、その結果として遺構密度が非常に高い。

このような集落遺跡は明石川流域の神戸市西区日輪寺遺跡、同池上口ノ池遺跡、同玉津田中遺跡唐土・狹間地区など、大中遺跡の近辺に多く見られる。

弥生時代から古墳時代への大きな変化は、農具の鉄器化という生産手段の革新による開発能力の飛躍的な向上をもたらし、人間を新たなるフロンティアであるかつての生活不適地へと導いた。同時に生じた列島内外での地域間交流の活発化は生活様式の変革を促し、その結果として短期間での堅穴住居の進化を生じさせ、集落内に夥しい試行錯誤の痕跡を残した。大中遺跡は社会の大きな変動期における人間

の力強い営みを台地に刻み込んだ遺跡であり、古墳時代に入り社会が安定するとともに、開発よりも生活の適地へと人々が回帰していく中で衰退してゆくのである。

この土地に再び人が大規模な集落を形成するのは平安時代後期である。この時代はまた、莊園開発によって象徴される大規模な開発の時代であり、大中遺跡は再び開発の拠点となるのである。

参考文献

高橋 学 1990 「播磨大中遺跡の環境」『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館

山本三郎 1990 「大中遺跡の後期・終末期弥生土器」『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館

兵庫県教育委員会 1996 『玉津田中遺跡 第6分冊（総括編）』

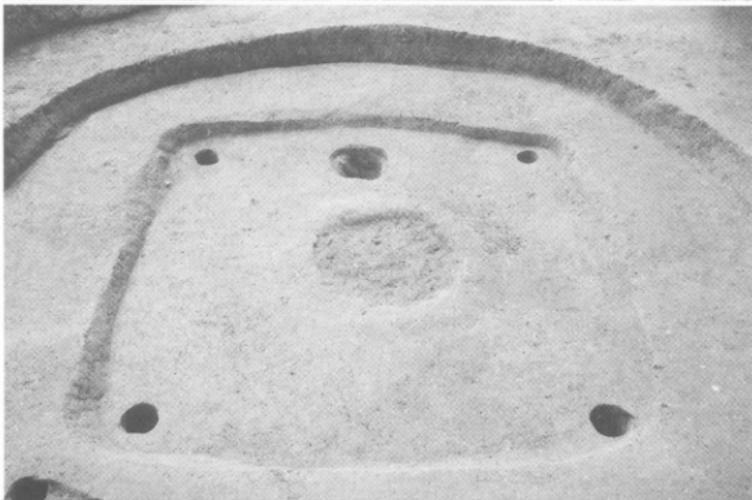
写 真 図 版



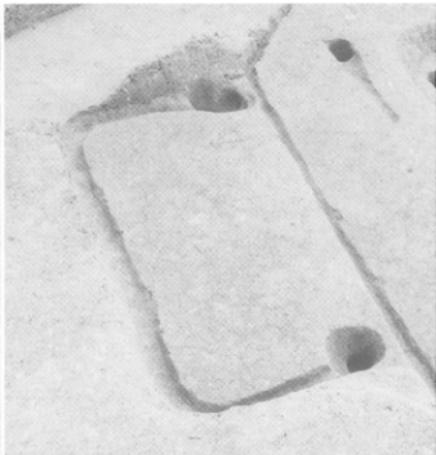
SH1901（南から）



左 SH1901（東から）
右 SH1901土器出土状況
(南から)



SH1901床面（北から）



左 SH1901中央土坑
(北から)

右 SH1901張り出し部
(西から)



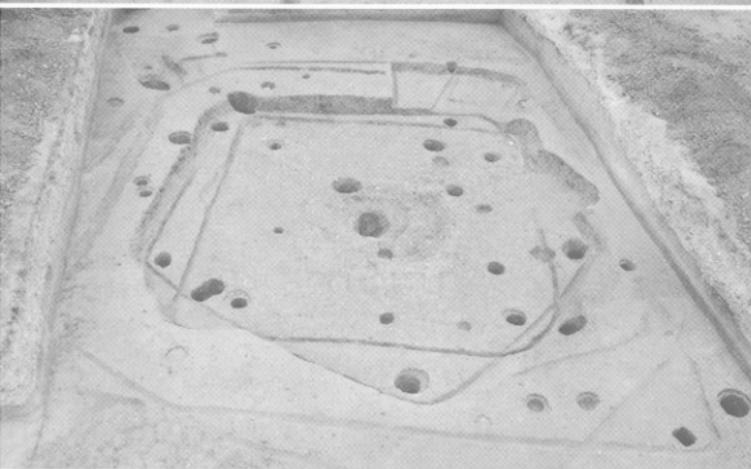
SH1901土器出土状況
(西から)



SH1901と考古学者



SH1902a (南東から)



SH1902a (北東から)



SH1902a中央土坑
(北東から)



SH1902b・c（南東から）

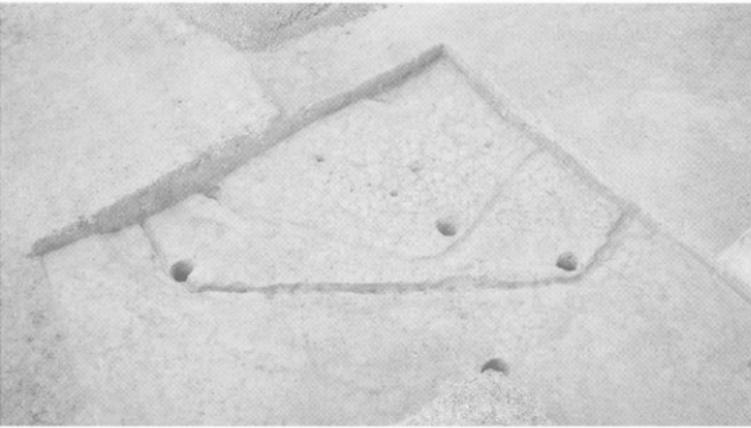


SH1902b・c（西から）



左 SH1902調査風景
右 SH1902と復元住居

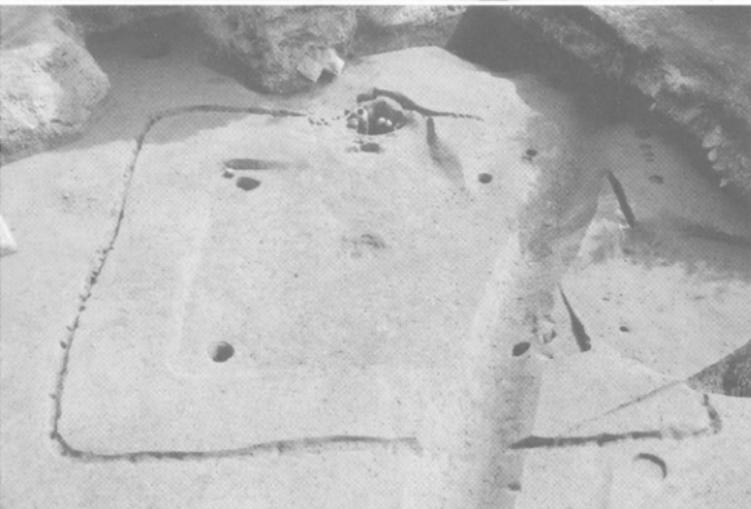




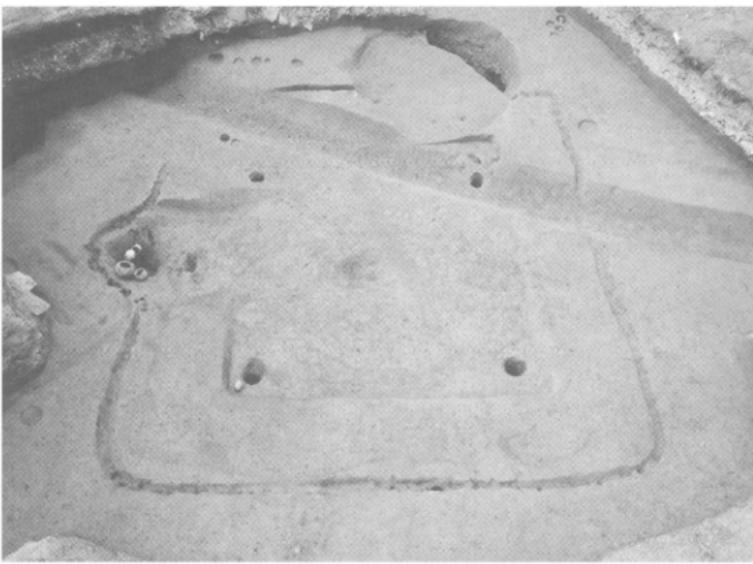
SH1903



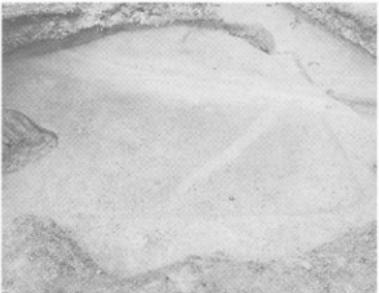
SH2001a・b (北西から)



SH2001c (北西から)



SH2001c (東から)



左 SH2001検出状況
(東から)
右 SH2001セクション
(東から)



SH2001c土坑 (北西から)



SH2002検出状況
(北西から)

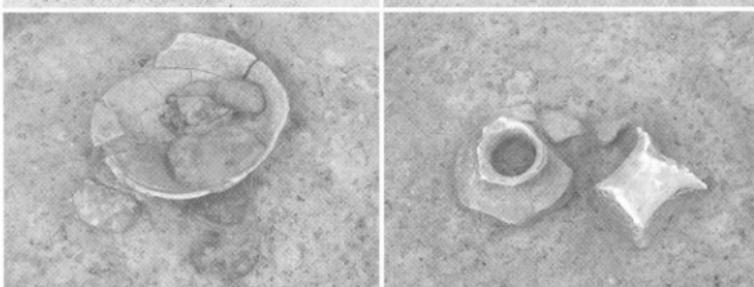
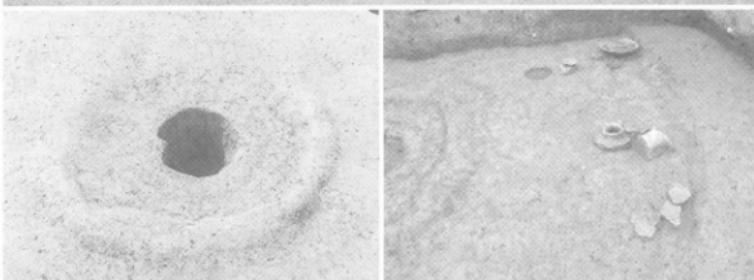
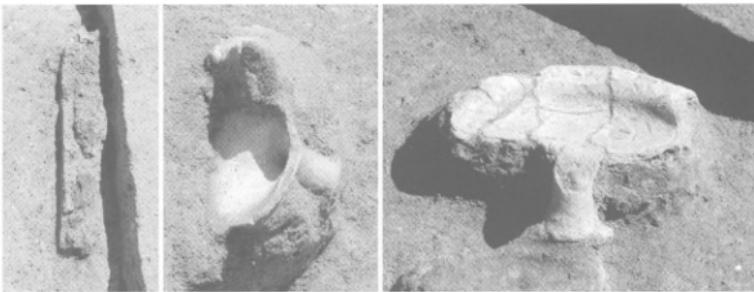


SH2002 (北西から)



左 SH2002 (南西から)
右 SH2002検出状況
(北西から)







トレンチ32（南西から）



SB2001（東から）



SK1901（北東から）



SK1901（南西から）



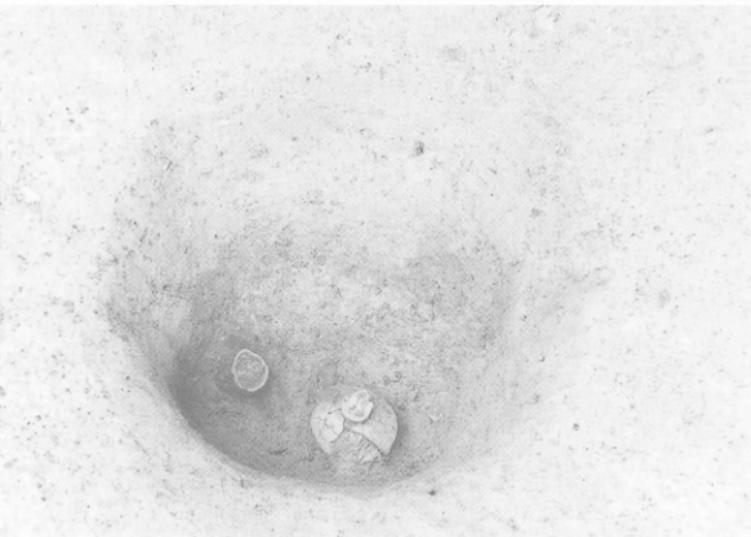
SK1906（北から）



SK1910 (南西から)



SK1910土器出土状況
(北東から)



SK2012 (北から)



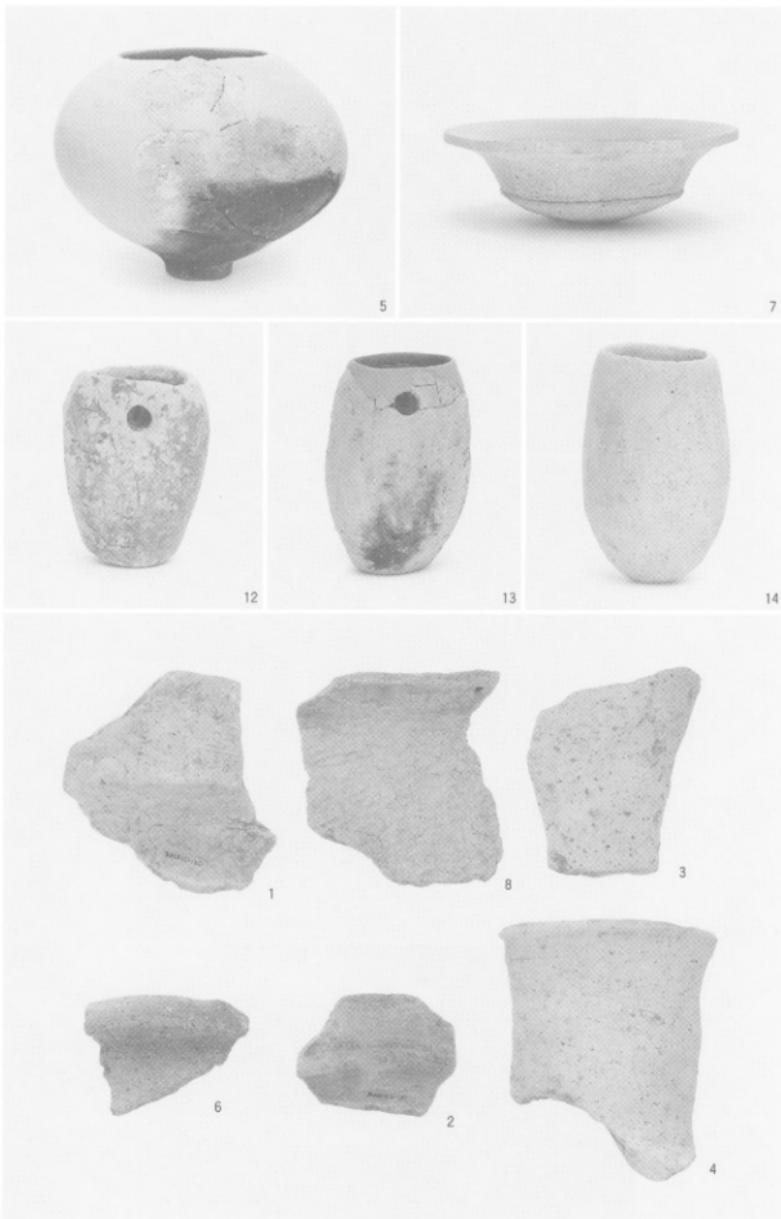
SK2013（東から）



SK2016（南西から）



SD2007断面（南西から）



SH1901出土土器



17

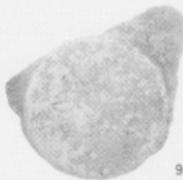


19



18

SH1902出土土器



9



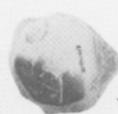
10



20



15



11



21



16

SH1901・1903(20・21)出土土器



25



22



26



27



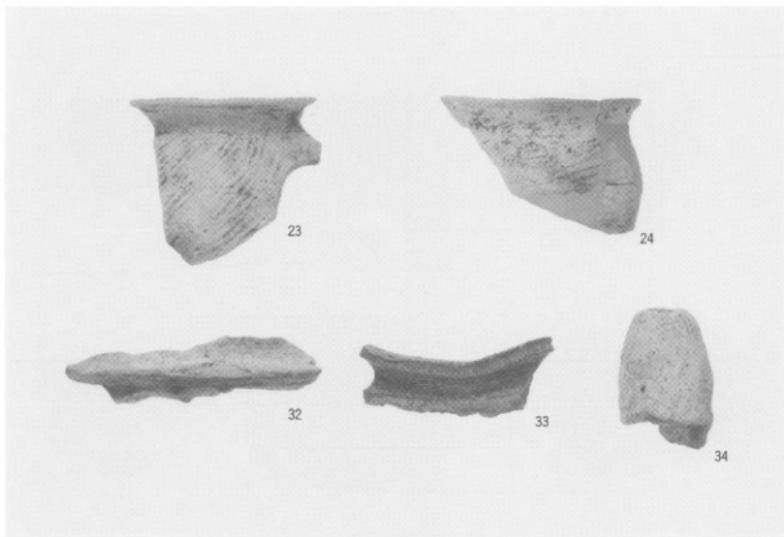
29



30



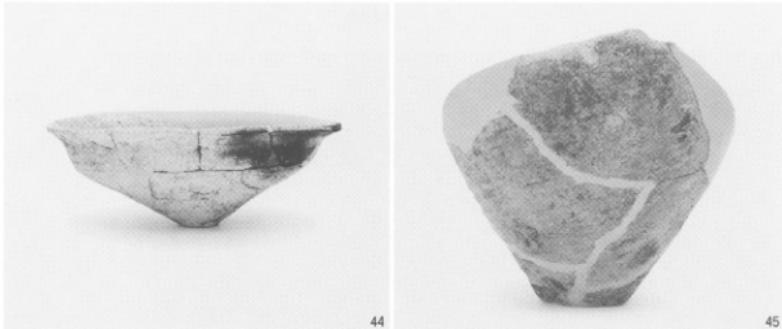
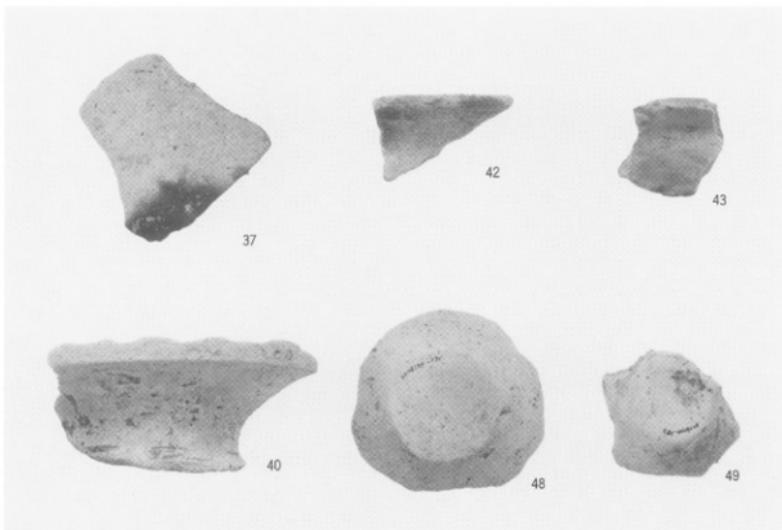
31



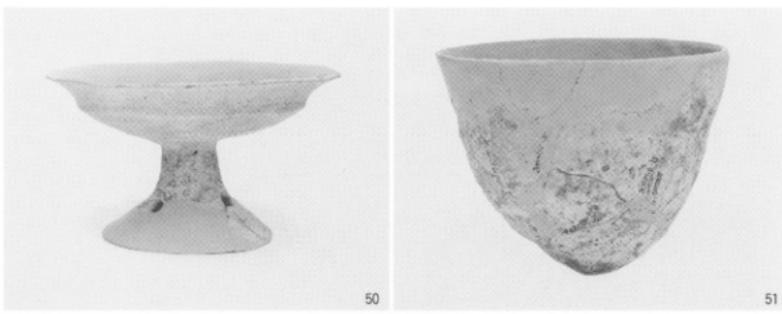
SH2001出土土器



SH2002出土土器



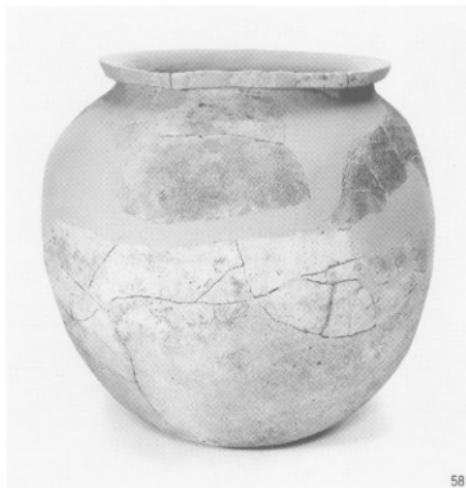
SH2002(37)・SH2003出土土器



SK1901出土土器



SK1906出土土器



SK1910出土土器



59

SK2012出土土器



62

SK2013出土土器



63



67



68



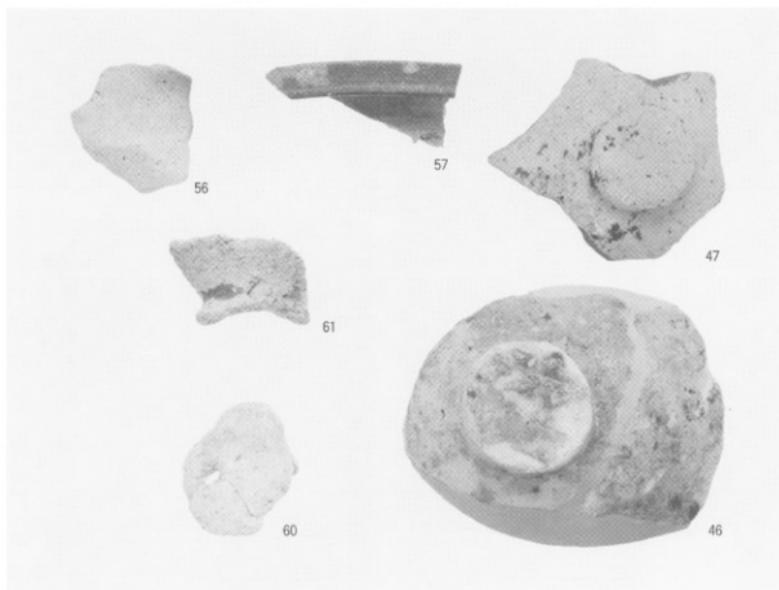
64

SK2016出土土器

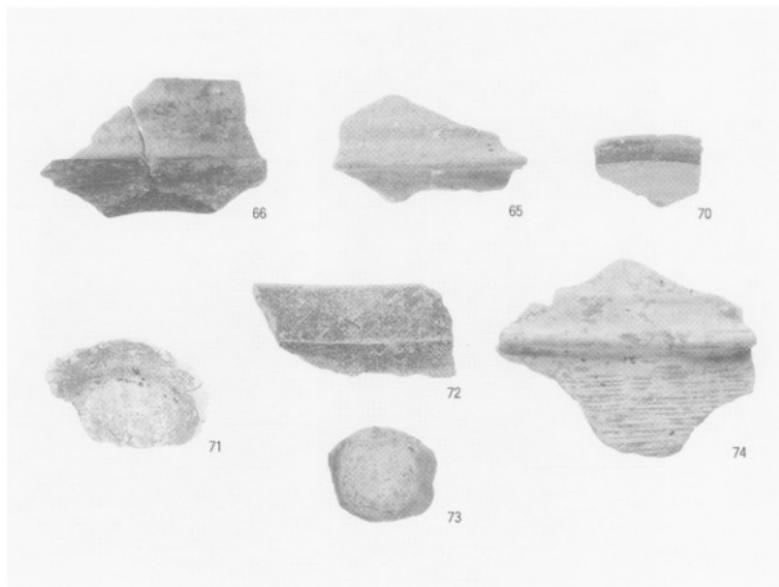


69

SK2019出土土器



SH2003・SK1906・1910・2012出土土器



SK2019・2020・P76・SD2007出土土器



S 1



S 2



S 4



SH1902



S 6



S 7

SK1903ほか



S 3

SH1901



S 5

SK1901

出土石器

報告書抄録

ふりがな	おおなかいせき						
書名	大中遺跡						
副書名	史跡大中遺跡内容確認調査(第19次・20次)報告書Ⅰ						
卷次							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第273冊						
編著者名	種定淳介・小川弦太・藤田淳・多賀茂治						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011						
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-341-7711						
発行年月日	2004年(平成16年)10月29日						

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
大中遺跡	兵庫県 加古郡 播磨町 大中	28382	2002116	34度 43分	134度 52分	2002.7.9 ~10.4	528m ²	史跡大中遺跡内容確認のための調査
			2003100	37秒	38秒	2003.7.15 ~11.14	372m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大中遺跡	集落跡	弥生時代後期		竪穴住居跡		弥生土器		国指定史跡

兵庫県文化財調査報告 第273冊

大 中 遺 跡

- 史跡大中遺跡内容確認調査

(第19次・20次)報告書 I -

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 福田印刷工業株式会社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
